



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



BOUDICCA : 真実と詩

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-06-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹内, 豊 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10258/3353 |

BOUDICCA¹⁾ —— 真実と詩

竹 内 豊

BOUDICCA

— Rebellion and Aftermath —

Yutaka Takeuchi

Abstract

This paper consists of two chapters. Chapter I is the history or reality of the great rebellion of Boudicca, Queen of the Iceni. The historical background of Roman Britain and, the roots, the progress, and the end of this rebellion should be referred accepting the accounts of Tacitus and the statements of modern historians. Chapter II is the aftermath of the great rebellion. The dramas, poems, and sculpture from this rebellion should be studied reading the records on them and the English history.

§ 1 真実：ここでいう真実とは reality であり, history である。それはボウディッカが叛乱を起すまでの歴史的背景, そして叛乱, その結末を述べるものである。

メタリス・アエストゥアリウム *Metaris Aestuarium* (今日のウォッシュ湾 *The Wash*) とタメシス *Tamesis* (今日のテムズ河 *R. Thames*) との間, いいかえると今日のノーフォーク州 *Norfolk* とサーフォーク州 *Suffolk* 及びケインブリッジ州 *Cambridgeshire* にわたる平坦な地域を占めていた当時のイケニ族 *Iceni*²⁾ の王プラスタグス *Prasutagus*³⁾ が 59 年⁴⁾ に死んだが, 彼はローマ皇帝クラウディウス *Claudius*⁵⁾ が 43 年秋ブリタンニア⁶⁾ に遠征した際に一戦も交えることなく臣従し, 帝から特にその身分を保証されたクライアント・キング *client king*⁷⁾ の一人であった。彼と妻ボウディッカとの間に 2 人の娘⁸⁾ があ

るだけで嗣子がなかった。そのため彼は生前に自分の財産の半分を皇帝ネロ Nero⁹⁾に、残りの半分を2人の娘に贈った。皇帝に遺産を贈ることによって嗣子のないイケニ王朝の断絶が避けられることを願ってであった。このことはわれわれにクライアント・キングが世襲のものでないことを教える¹⁰⁾。また嗣子のあるなしに拘わらず遺産の一部をローマ皇帝に贈らなければならないとしたのは、かの狂気の浪費家皇帝カリグラ Caligula¹¹⁾の発案によるもので爾来それが慣わしとなっていた。これを怠るものはローマ¹²⁾に忠節心がないとして全財産が没収されたのであった。

ネロの治世に及んで事情は更に変わってきた。先づ第一にローマはブリタンニア統治のために駐屯させる軍隊やその他万般に要する多額の費用の割に、それに引き合うだけの見返りが得られず、その上ブリタンニアは絶えずローマに紛争を起こす状態で属州の中での悩みの種であった。また更にネロ個人の性格¹³⁾からも彼は一時ブリタンニアの統治を放棄しようとさえ考えたことがあった¹⁴⁾。

次にネロはローマの古風にして因襲的なものに束縛された保守的伝統主義を好まず、ギリシアの解放的で享樂的な芸術的民主主義なものに深く憧憬し、そういった生活様式を理想としたので万事に出費の嵩む状態にあった¹⁵⁾。彼はこのためにも財源を得るのに腐心していた。財源を得るのに最も簡単な方法は莫大な財産をもつ貴族や富豪に政治的陰謀と宣してその財産を没収することであった。ネロは彼等の財産を奪うために富裕な連中を死刑とした皇帝の一人といわれる¹⁶⁾。その最も卑劣な例はアフリカ州、すなわちアフリカ大陸の北岸の一部である旧カルタゴ領の半分を所有していた6人の大地主を死刑にしてその土地を没収・売却したと伝えられる¹⁷⁾。また卑劣ではないが、まことに愚劣と思われる次の出来事はそれだけに彼が財源を得るのにいかに苦心していたかがわかるものである。時代は下がるが65年、ネロは64年のローマの大火後の再建（これにはかの有名な黄金宮殿 Domus Aurea¹⁸⁾の新造も含まれる）で彼の財政はまさに窮していた矢先に、カルタゴ人といわれるケセリウス・バッスス Cesellius Bassus という男が、かねてから、カルタゴ市の創設者

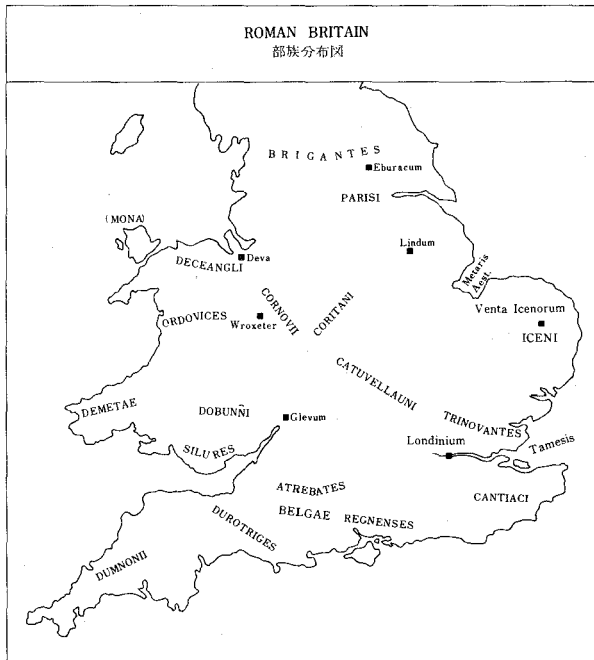
であったディド女王 Dido¹⁹⁾が自分の所有地内のいくつかの洞窟の中に葬られているという推測をたてていて、それがすっかり妄想に発展して、彼は口にはいいつくせない程の莫大な量の黄金が巨大な伸べ棒や鑄塊として埋められている場所を知っていると信じ込み、遂にこれをネロに告げるためにわざわざローマにやってきた。ネロは忽ちこの話に飛びつき数隻の船と人間とをカルタゴに送り、ネロをはじめとして多くの者がその財産が眼前に積み上げられるのを今かと待ったのであった。何千という土民がその発掘に雇われて作業は進められたが、どこを掘り返してもすべて徒労であった。空想家のバックスは失望の苦しみの余り自殺をとげ、彼の死と発掘の失敗の報がネロのもとに届いた時の彼の失望は余りにも痛々しかった²⁰⁾。このようなネロにとってプラスタグスの死は絶好の機会であった。プラスタグスは全くその死の時期を誤まった。

プラスタグスとローマ側の意向との間には大きな差があった。プラスタグスは自分が皇帝に捧げた遺産は充分であると考えたが、ローマ側はそうは考えなかった。新しく征服されたところ同様に見倣して領土全部がローマに献ぜられるべきことを主張した。このことはいう迄もなくローマが王国全体を完全に支配することを意味した。ローマはイケニ王国に限らず、かねてからクライアント・キングの死を契機にこの制度を廃止し、その領土を没収しようと考えていたところであった。一方イケニ族はトリノワンテス族²¹⁾とはちがってクライアント王国であったから彼等はトリノワンテス族よりは遙かに優遇されることを期待したにも拘らず、彼等は兵役にとられて奴隷のように道路建設などに酷使された。また武器の携帯も禁ぜられた。とりわけ誇り高いイケニ族にはこれが大きな侮辱と思われ、独立心の強い彼等がローマの拘束をよろこぶものではなかった²²⁾。特に寡婦のボウディッカはローマに臣従していなかった。このことがローマにとって大きな問題点であった。

既に財源問題からローマの政策は 57 年頃にブリタンニアの知事となったクイントス・ヴェラニウス Q. Veranius²³⁾の時から大きく変わり始めていたところにプラスタグスの死と共に残されたイケニ部族及びボウディッカの新

しい問題がクローズ・アップしたのであった。ローマはプラスタグスに嗣子のないことを以ってイケニ王朝は断絶したとし、ヴェラニウスが新しい知事となったのと同じ頃に *procurator* (財務官)²⁴⁾となったカータス・デシアヌス Catus Decianus²⁵⁾は前皇帝クラウディウスがイケニ族に与えたもの²⁶⁾は返済されるべきものであるという見解に立った。イケニ族の方はそれは貰ったものであって返済の義務はないと主張したが、デシアヌスは貸与したものであるからといってその返済を飽く迄も強く主張し、更にその利息分までも徴収する手段に出た。その取り立てはまことに厳しく、彼は住民の憎悪の対象となっていた。彼は遂にプラスタグスの財産はもとよりイケニ王族の全財産にまで手をつけようとした。こうして徴税・土地収用にきたローマ役人は戦争と変わらぬやり方で王宮を襲い、これに抗議するボウディッカを袋づめにして鞭打ち、王女を凌辱した²⁷⁾。

第1図



一方南隣エセックスのトリノヴァンテス族においては事情は少しちがっていた。彼等はクラウディウスのブリタンニア遠征で属州とされ、彼等の国はコロニア・カムロドゥヌム *Colonia Camulodunum* と名づけられ、以来彼等は被占領民としての取扱いを受けてきていた。そうして49年から50年²⁸⁾にかけて当時の知事のオストリウス・スカプラ *Ostorius Scapula*²⁹⁾ はシェイクスピアの戯曲『シンベリン』 *Cymbeline*³⁰⁾ で名高いクノベリヌス³¹⁾ 王朝の都のカムロドゥヌム³²⁾ に近い西側の地に新しい彼等の都を造営した。このローマの都を守備する軍人は20年以上の兵役にあった退役軍人で、都が出来てその任に就いた日から極めて横暴で住民を囚人か奴隷のように扱って住民のげんざい反感をかっていた。

このように2つの部族のローマに対する反感の因子はちがっていたが、彼等は次の共通したローマの搾取に悩まされていた。それは課せられる税金の重いこと³³⁾の他に彼等がローマ化するためには部族としても個人としても多額の費用を要したことであった。すなわちローマは先きに建てたカムロドゥヌムの都に当時まだ存命中のクラウディウス帝を祀る神殿³⁴⁾をも建て、これを「ローマ支配の永遠の砦(象徴)」 *arx aeternae dominationis*³⁵⁾ とした。そうしてこの神殿の維持・祭祀の遵守・それに要する費用をすべて住民に強要した。更にまた上流階級はその生活を自らもローマ化するために、ローマ軍団に随いてこの地に入ったローマ商人からローマの奢多品を買って、ローマの高利貸から多額の債務を負っていた。この高利貸の筆頭にわれわれは全く意外と思われる人物の名を見出して驚くのである。それはネロの師となり、世には慈悲と簡素な生活を説いたセネカ *Seneca*³⁶⁾ の名である。彼はブリタンニアの住民に10,000,000セステルティを貸したとも、また40,000,000セステルティを貸したともいわれる³⁷⁾。倫理哲学を説くものが、しかもネロから莫大な報酬を得ているものが高利貸であるとは全く異常のことで、これ程彼の実践倫理の破綻を示めすものはないのである。セネカをはじめとするローマの高利貸は自分たちが余りに手を広げ過ぎたことに気付いて59年頃からその貸金の回収にとりかかっていた時に、デシアヌスの強硬策が行われ

たのであった。狼敗したのは高利貸であって彼等は金の返済を強く迫り、日頃の強欲・横暴・非情を一層露骨に示した。住民の怒りは今やその極度に達した。このことからボウディッカ叛乱の最大の主因はセネカにあるとさえいわれるのである³⁸⁾。

知事は既にスエトニウス・パウリヌス Suetonius Paulinus³⁹⁾に交代していた。彼は万事に積極的で、また名声を望む人であった。この頃⁴⁰⁾彼はモナ島 Mona⁴¹⁾の遠征に着手していた。夏も可成り早い頃に⁴²⁾デヴァ Deva⁴³⁾を基地としてメナイ海峡 Menai Strait(s) を距ててモナ島を眼前にしていた。率いた軍団は第14軍団⁴⁴⁾と、補助隊⁴⁵⁾を含めた第20軍団⁴⁶⁾の一部であった。このモナ島はカラタクス Caratacus⁴⁷⁾の残党ばかりでなくブリタンニアの各地から集った反ローマの謀叛者の巢⁴⁸⁾であり、またケルト族に極めて重要にして神聖な存在であるドルイド教団⁴⁹⁾の本拠でもあって、この聖地を犯すローマに対してのブリタンニア住民の怒りは激しいものであった⁵⁰⁾。

このように種々の不満・反感がかねてからブリタンニア側に根強くあった時にローマの暴状・凌辱に端を発したイケニ族の憤激は、知事スエトニウス・パウリヌスの不在を好機として直ちにトリノウァンテス族に波及し、更に先きにオストリウス・スカブラによって武装解除を余儀なくされてローマの圧制に同じく苦しんでいた近隣のブリガンテス族⁵¹⁾もこれに同調した⁵²⁾。こゝにローマ支配に対する一大叛乱——世にボウディッカの叛乱と称する劇的なものとなった⁵³⁾。タキトゥスの筆致は叛乱の責任はローマ側にあるとしてブリタンニアに同情的である。

丁度この頃何の原因もないのにどうしたわけかカムロドゥヌムのクラウディウス神殿にあった勝利の女神像が突然倒れた。しかも攻めくる敵から退却するかのように後向きにその台座から倒れたのであった。これを見て女たちは叫び声をあげて通りに飛び出し、人々はこれをローマの破滅と信じた⁵⁴⁾。そうしてカムロドゥヌムではいろいろの——それはすべてやがて起こるこの叛乱の前兆ともいえるような噂が人々の口から口へと伝わった。それは植民市⁵⁵⁾の建物が揺れるように倒れるのが海の蟹気楼の中に見られたとか、

家⁵⁶⁾がタメシス河の水の底に沈むのが見られたとか、血の潮がいかにそれを赤く染めたかとか、岸辺にその建物が丁度人間の死体のように折り重って倒れたとか、ブリタンニアと大陸の間の海が血で真赤に染まってゆくのが見られたとか、また薄気味の悪い笑い声と一緒に何かわけのわからぬことをいうヒソヒソ声が真夜中の誰もいない市庁舎の建物や劇場の中から聞えたとか、というものであった。

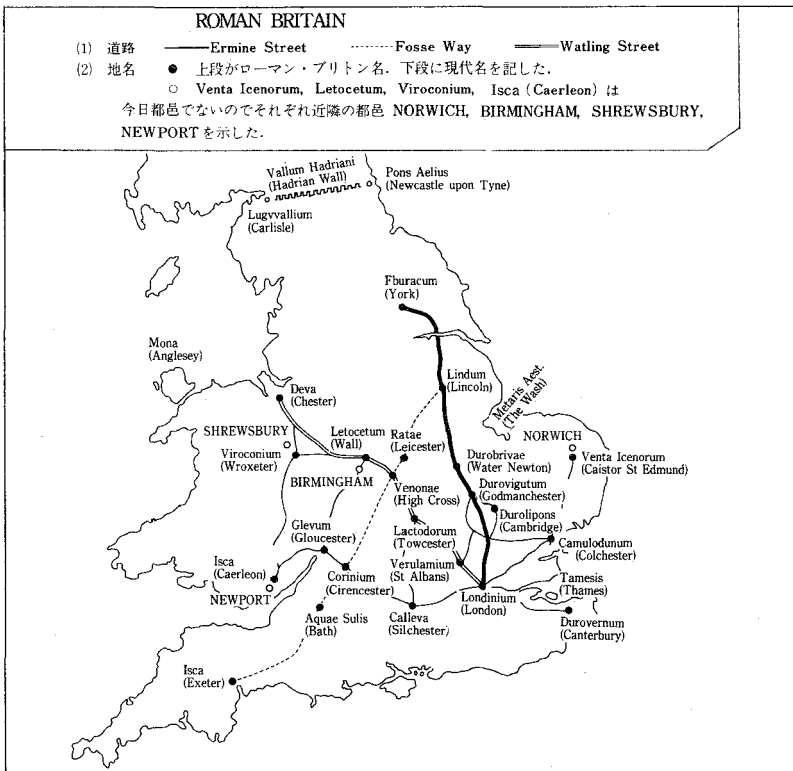
ボウディッカは 120,000 の軍勢を集めたといわれる⁵⁷⁾。ディオ・カッシウスの伝えるところによると総師のイケニの女王は知力に秀れ、背は高くその声は荒々しくきびしく、赤毛の髪は腰まで長く垂れ、首には大きな金のネックレスをつけ、眼光炯々とした鋭い容貌で、当時の習慣がそうであったように格子縞の袖の短い上着をつけ、更にその上にこれまた同じ格子縞の長いガウン風の上着を被り、それを金の大きなブローチで留めていた。手には槍が握られ、まさに凜々しい出立ちであった⁵⁸⁾。彼女は大軍を前にして、今われわれがおかれている奴隷の身にかんがみて自由とはどういうものであるか。ローマ人はわれわれの国土を蹂躪してわれわれの財産・われわれの古来の尊い土地を奪っておきながら、われわれに重い税金を課している。どうしてわれわれは奪われた自分の土地に税金を払わねばならないのか。死ぬことにおいてさえも今やままならぬ有様である。ローマ人に比べてわれわれの陣営や武器は強大であり、しかもわれわれは彼等よりも寒さ・暑さ・餓え・渇きに強く、泳ぎの腕前も比較にならぬ程巧みである⁵⁹⁾。われわれを犬や狼にたとえるならばローマのものどもは兎や狐に過ぎない、と大演説を行った⁶⁰⁾。

彼等が最初に襲った町は、イケニ王国の都ヴェンタ・イケノルムから75 ローマ・マイル（現今の道路では約 114 km）離れたカムロドゥヌムであった。ローマはトリノヴァンテス族が従順なものと同信していたので自分たちの都には城壁も築かず、その守備も前述のように退役軍人に任せ、その数も僅か数百人⁶¹⁾であった。ローマ植民市の連中にはまだロンディニウム Londinium⁶²⁾に救いを求める時間があつた。ロンディニウムにいた *procurator* のカータス・デシアヌスは充分な武器も持たない男たち 200 名を応援に派遣しただけで、

彼自身はこの叛乱の大きいことを知った時に驚愕して逸早くロンディニウムからルトウピアエ（注5）に走り、船でガッリア Gallia⁶³に逃げた。

カムロドゥヌムにおけるボウディッカの攻撃の第一目標——これは言う迄もなくクラウディウスの神殿であった。神殿はボウディッカは無論のことブリタンニアの住民にとっての憎むべき *arx aeternae dominationis* であった。しかもロンディニウムから駆けつけた応援部隊とこの都の守備の退役軍人などのローマ人及び武器を持ったローマの同盟者はこの神殿をまさしく砦として立て籠ったからである。しかし神殿は忽ち攻略され全員が虐殺された。収納されていたクラウディウスの分骨はそのブロンズ像と共に川に投げ捨てられた。やがて町には火が放たれ2日間燃えつづけた後クラウディウスの神殿

第2図



などが黒焦げとなって崩壊し、その残骸が僅かに残るだけの廃墟と化した。ここにわれわれはブリタンニアにおけるローマ植民地の最初の灰燼を見るのである。男たちは戦死し、女たちのある者は手足を切られ、ある者は串刺とされて叛乱軍の残忍な加虐行為の狂乱の生贄とされた。

叛乱の報は各地に伝えられた。しかしスエトニウスは 400 km 離れたモナ島の攻略にかゝっていた。カムロドゥヌムの約 190 km 以内にはローマ軍の駐屯地はなかった。リンドム駐屯の第 9 軍団⁶⁴⁾の司令官ペティリウス・ケリアリス Petillius Cerialis⁶⁵⁾ は後年、71 年から 74 年までブリタンニアの知事となった立派な軍人であった。この急をきいて彼は紫と白の軍服をつけ勇敢なヒスパナの精鋭 2,000 を率いて現今のアーミン・ストリート Ermine Street⁶⁶⁾ とよばれるローマン・ロードを南に駆けた。彼はドゥロブリヴァエ Durobrivae (今日のウォーター・ニュートン Water Newton)、ドゥロヴィグトム Durovigutum (今日のゴッドマンチェスター Godmanchester) を通り、ドゥロリポンス Durolopons (今日のケンブリッジ Cambridge) から現今ホースヒース Horseheath⁶⁷⁾ といわれる地点へ通ずるヴィア・デヴァナ Via Devana というローマン・ロードを駐け抜けてカムロドゥヌムに着く筈であった。しかしカムロドゥヌムの植民市を既に灰と化せしめ、今や勝ち誇ったボウディッカは北へ進んでケリアリスをドゥロブリヴァエとドゥロヴィグトムの間のどこかの地点⁶⁸⁾で迎え撃った⁶⁹⁾。第 9 軍団の精鋭も最早、勢に乗じたボウディッカの相手ではなかった。ケリアリス自ら兵と共にリンドムに遁走せざるを得なかった。

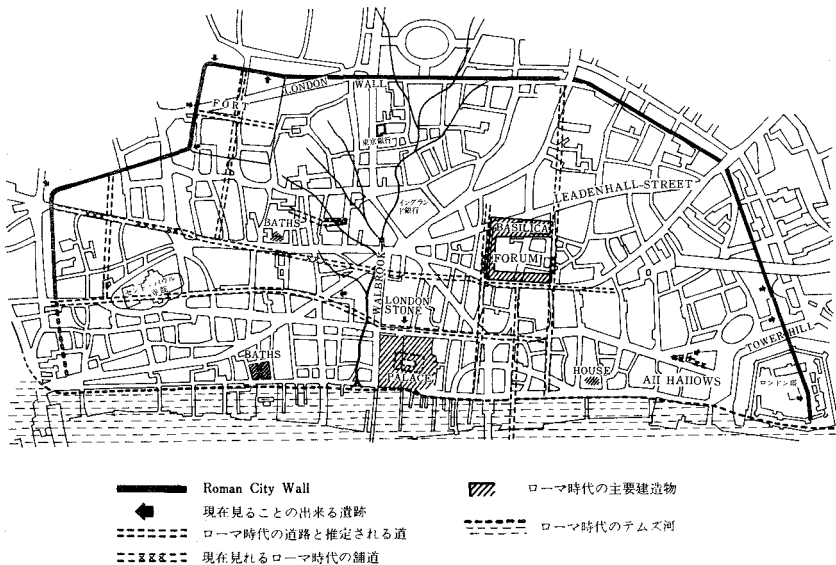
一方モナ島に進撃していた知事のスエトニウスはこゝで奇妙な抵抗に遭遇した。かねてからこの島に集って住民や反ローマ分子を励ましてローマ反抗を続けていたドルイド教徒たちは人間を生贄に捧げた火を囲み、両手を天に差し、のべて侵略者撃退を祈って身の毛もよだつ呪詛を唱えていた。そうしてその前を黒い服をまとい髪をふり乱した女たちが復讐の女神のように松明をかかげて走り廻り、男たちは武器をかまえて狂信の態で列を組んでいた⁷⁰⁾。ローマの軍隊はこの余りにも奇怪な光景に一瞬たじろいだが、士気を高めて

この恐るべき奇怪な状態の戦士たちを皆殺しにし、全島の征服にとりかゝった。この時であった。叛乱の報がスエトニウスのもとに転がり込んだ。彼は直ちにモナ島の攻略を中止した。彼が先ず心配したのはロンディニウムの安否であった。現今ロンドンの名となっているこの町はクラウドィウスの遠征当時既にタメシス河に木橋が架けられ、ブリタンニアの各地に通ずる交通の要地となっており、特にタメシス河によって外海と結ばれていることから大陸との交通・交易の中心となっていた。ローマの軍需基地も置かれていた。基地は若干の守備兵に守られてはいたが、町全体は交易商人の活躍する商業都市⁷¹⁾で、何の防壁もない全く無防備都市であった。スエトニウスは直ちに軍を率いてロンディニウムに向って出発することにした⁷²⁾。しかしロンディニウムまではデヴァからでも230ローマ・マイル(約370km)あり、モナ島からは少なくとも380kmはあった。最精鋭の歩兵でも一週間は要する。彼はこゝで大きな決断を行った。タキトゥスが「驚くべき決断力で」*mira constantia*⁷³⁾と述べているところである。彼は歩兵には後続を命じた。また第9軍団の敗北を知らなかったのでケリアリスが時を置かずして駆けつけるものと思った。一方グレヴウム駐屯の武勲輝かしい第2アウグスタ軍団⁷⁴⁾には途中⁷⁵⁾で合流するように伝令を飛ばし、アグリコラ Gnaeus Julius Agricola (40年-93年)以下の精鋭の騎兵を率いてワエクリンガ・ストレイイト Waeclinga Straet⁷⁶⁾を南に急行した。アグリコラは後にタキトゥスの岳父となった有能な人物で、ブリタンニアとの縁は深く、この後70年から3年間第20軍団の司令官としてブリタンニアに戻ってその時知事となって同じく再びこの地にあったケリアリスをよく補佐して功績を残し、更にまた78年⁷⁷⁾夏からは知事としてこの地に赴き84年(または83年)までその任にあったのであるが、彼はこの時ロンディニウムに向うどこかの地点で馬の背の上で21歳の誕生日⁷⁸⁾を迎えたといわれる。途中の道はゲリラが既に出没して全く安全ではなかったので彼は22歳を迎える日はもうないものと思ったことであろう⁷⁹⁾。しかしスエトニウスの一行は翌日ロンディニウムに無事到着することが出来た。スエトニウスがそれまで考えていたことはボウディッカがどこ

か、例えばフォス・ウエイの守備兵を襲うなどして時間を費してれば、自分の方が先にロンディニウムに到着出来て町を守ることが出来るということであった。彼の考え通りボウディッカはこのように途中寄り道⁸⁰⁾をしていたので彼は先きに到着出来た。しかしそれは先きに到着したのいうだけのことに過ぎないことを着いて一兩日も経たぬうちにわかった。先きに命令を与えた第2軍団は途中で合流するどころか、未だに到着しないのである。この軍団はその駐屯位置から推してみても直ちに行動を起こしていれば当然途中で合流し、その一部(騎兵)はスエトニウスの一行と共にロンディニウムに到着出来た筈であった。当時第2軍団には正規の司令官がおらず、*praefectus castrorum*(主計将校)のポエニウス・ポーストマス Poenius Postmus がその代理を勤めていたが⁸¹⁾、彼はボウディッカの軍勢の余りに強大であることと第9軍団が敗れたことを知って恐怖し、スエトニウスの命令を受けても躊躇して行動を起こさなかったのであった。スエトニウスは第2軍団の命令違反を知り、更にヒスパナの敗北も知った。そうして第9軍団のそうした状態では駐屯地の維持が精一杯でそれ以上の行動の望み得ないことをも推測した。また彼はボウディッカの軍勢の強大なことも知り、これらをすべて総合してみても自分の率いている僅かの騎兵だけでは拠り所となる防壁も何もないロンディニウムは守り通せないと判断した。こゝにロンディニウムの町は運命のなすがまゝとされた。彼は再びワエクリング・ストレイイトを北に引返した。彼はヴェルラミウムをも見捨てた。この町は既に注2で述べたように早くから開けた町で50年頃既にローマ化し、最初のローマ市民権都市となったところで、住民の中にはローマ市民権を与えられた者もあり、ローマ風の石造りのヴィラ Villa の並ぶ町であった。スエトニウスがこのようにして一旦西北に後退し、しかもまだロンディニウムからそう離れない地点を走っている頃、ボウディッカの大軍は北または北東からロンディニウムの町にだれ込んだ。木造の家は忽ち火に焼かれ、今日ロンドン塔 The Tower of London (単に The Tower ともいう)の西向いのオール・ハロズ教会 All Hallows⁸²⁾の地下納骨堂に至る地下道の煉瓦の壁にはこの時のものといわれる灰がその重い建

物の圧力を受けて約3 cmの黒い堅い層となっているのが見られ、またウォルブルク Walbrook⁸³⁾とロンドン橋 London Bridge の間の地下3~5 m⁸⁴⁾のとこにやはりこの当時の灰の層が見られるといわれる。このことからみてボウディッカの襲撃目標となるもの、すなわちローマの役所がこの辺りにあったことが容易に気付くのである⁸⁵⁾。ボウディッカの軍はロンディニウムの市民を捕虜とすることなく皆殺しとする大虐殺を行った。しかもその方法はカムロドゥヌムにおけると同じように眼を敵う残忍なものであった。タキトウスは虐殺のあった事実だけを述べているが、ディオ・カッシウスはその残忍な虐殺の悲惨な有様を描写している⁸⁶⁾。それによるとアンドラストエ Andraste の森⁸⁷⁾で生贄とされた女たちの惨状は甚だ酷いものであった。特に身分の高い女たちや富裕な身の女たち⁸⁸⁾は裸でつるされ、乳房を切り落されてそれをあたかも自分が食うように口の中につめ込まれた。それから彼女たちは串刺とされた。しかもそれは縦串しであった。この生贄のやり方は彼等の勝利の女神に対するケルトの祭祀に一致するものであった⁸⁹⁾。

第3図

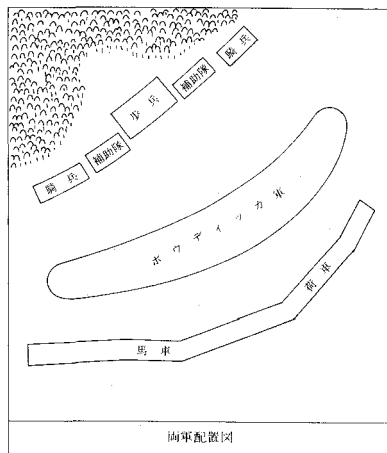


次に彼等の目標となったのはヴェルラミウムの町であった。この町も先きの2つの町に変らぬ同じ運命をたどるだけであった。殺戮も前と同じようにすべて斬殺・焚殺・磔といった残忍非業のものであった。またやはりこの地でも当時の焼けた壺・煉瓦・灰などがみられるのである。

この3つの都市⁹⁰⁾で殺戮された人の数をタキトウスは70,000といい、ディオ・カッシウスは80,000⁹¹⁾と伝えている。いずれにしても驚く程の多くの人間が犠牲となった。当時ロンディニウムの人口は25,000から30,000と数えられていた。しかしタキトウスはこの70,000という犠牲者の数を記述した個所で *constitit* という語を使っているのは彼がいかにその時点でこの数に確信を持っていたかということがうかがえるのである⁹²⁾。

さてスエトニウスはヴェルラミウムを抜けて既に遠く後退し、ある地点でようやく軍勢を動員することが出来た。その地はヴェルラミウムとヴィロコニウムの間の、しかも後者に可成り寄った地点とされるが、大方の推測は今日のバーミンガムの北リッチフィールドの近くのレトケトム⁹³⁾としている。後続してきた第14軍団、それに第20軍団の一部⁹⁴⁾とその補助隊を合せ約10,000⁹⁵⁾の兵を動員したスエトニウスは冷静に状況を判断し、戦闘に有利な地形の場所を注意深くえらんだ。それは正面以外からの敵の攻撃を避けるために2つの森が彼等の背後を囲むように入りの狭くなった地形であって、騎兵には敵の側面を突くように両翼に配置させた。ボウディッカの大軍は数kmにわたって道にあふれる無秩序の状態に進んできた。タキトウスが

第4図



「かつて前例のない程の大軍」 *quanta non alias multitudo*⁹⁶⁾ と述べその数は120,000ともいわれた⁹⁷⁾。彼等は大陸のゲルマン人と同じように⁹⁸⁾妻子を戦

場の外縁に並ぶ荷車や馬車の上に坐らせて既に勝利を得たように意気軒昂たる有様であった。ボウディッカは自分の前に2人の娘を乗せた戦車を駆って部隊の隊列に近寄って次のように彼等の愛国心と敵愾心とに訴った。「われわれは昔から女の指揮⁹⁹⁾の下で戦争をしてきた。しかし今は由緒ある王家の女王として自分の奪われた王家の富のために戦うのではない。一人の人民として奪われた自由と、鞭で打たれたこの身体と、凌辱された娘の貞節のために戦い復讐するのである。ローマ人の欲情は今やわれわれの身体でさえ容赦することなく、老人や処女の身体にまで見境いがない。神々はわれわれの行う復讐を正しいものとしてわれわれを加護している。既に敢えて戦いを挑んだローマの軍団は全滅した。生き残った連中はその陣営に身を潜めているか退却の機会をうかがっているだけだ。彼等は何干というわれわれの軍勢の天を突く勢の喊声と怒号にさえ立ち向う勇気がなく、われわれの攻撃と武器とに対しては尚更のことである。われわれは皆、どれ程多くの人間が戦いに参加し、また何がためにこのように戦わなければならないかということを考えるならば、われわれは何としてもこの戦いに勝たねばならない。それでなければ死ぬべきである。これが一人の女として自分が決意するところである。男たちは生き残って奴隷となりたければなるがよい！」¹⁰⁰⁾

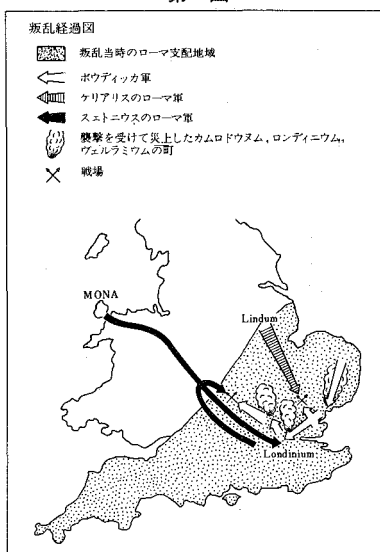
一方スエトニウスは麾下の軍隊がボウディッカの大軍を前にして勇気を失うことはない信じながらもこの重大な決戦の時に当り、「野蛮人の喧騒やつまらぬ脅迫に怖れるな！見たところ敵は戦士よりも女が多い。戦争を知らず武器もない連中だ。彼等は今までにも度々敗北しているので、われわれローマ軍の剣と勇気とをみれば忽ちのうちに屈服するだろう。たとえ軍団にいかにも多くの兵士がいても戦争の運命を決めるのは少数の兵だ。お前たちが僅かの兵力でブリタンニア駐屯のローマ軍全部の榮譽を占めれば、それはどれ程お前たちの名誉を高めることになるかがわかるだろう。戦いが始まったら、はじめのうちは隊列の間隙をつめておけ。それから投槍を放ち、次に楯と剣とで休むことなく敵を突き倒し、斬り倒せ。掠奪のことなど考えるな。戦に勝てばすべてがお前たちの物だ¹⁰¹⁾」と大いに激励した。

いよいよ戦闘が始まった。最初の間ローマ軍は狭い入口を自然が与えた岩として自分の陣地を固守して動かなかつたが、ボウディッカの軍が近くに攻め寄せてきた時、狙いを定めて投槍を放って敵を倒し、それから次に楔形隊形を組んで敵中に突進した。騎兵は突槍をかざして抵抗する敵を蹴散らした。命あって敗走するブリタンニア軍は名状しがたい混乱に陥って大敗北を喫した。それは彼等が妻子を乗せてきた荷馬車が今や逆に妨害物となってその退路を塞いでしまったからであった。ローマ軍は女にも容赦せず斬り殺し、引き連れてきた家畜にさえも投槍を打ち込んで屍の山を更に高いものとした。殺されたボウディッカの軍の数は80,000を下らず、一方ローマ側の死者は400人、負傷者も略それと同数であったといわれる¹⁰²⁾。スエトニウス・パウルヌスはボウディッカを捕えることも殺すことも出来なかったことの他に輝かしい勝利を収めた。ボウディッカは戦場を逃がれ自分の国にまでたどり着いたが、今や同盟せる叛乱部族は離散し、彼女は絶望してその誇り高い命を毒を仰いで自ら絶った¹⁰³⁾。

これが南ブリタンニアにおける *Götterdämmerung* であった。

この叛乱は10万人を越える人間を巻き込んだが、今日伝えられる名は僅か次の10名である。ブリタンニア側は王のプラスタグスと王妃ボウディッカの2名だけである。ローマ側は知事の
スエトニウス・パウルヌス、*procurator* のカータス・デシアヌス、その後任のユリアス・クラッシキアヌス¹⁰⁴⁾、第9軍団の司令官ペティリウス・ケリアリス、第2軍団司令官代理ポエニウス・ポストマス、スエトニウスの部下のアグリコラ及びこの叛乱の後の実情調査にこの地に派遣された

第5図



ポリクリトウス¹⁰⁵⁾の7名、合計9名の名をタキトウスがその *Annales* の中で伝えたが、考古学¹⁰⁶⁾は最近更にもう1名をこれに追記した。その名はクラシキアヌスの妻パカタ Pacata¹⁰⁷⁾である。

これらがこの叛乱の *dramatis personae* である。

§ II 詩： こゝでいう詩とは fiction, すなわち drama であり, poem であり, sculpture であって, 第一部「真実」についての芸術上の aftermath をいう。

(A) ボウディッカの物語を劇として最初に舞台上げたのはフレッチャー John Fletcher である。彼は 1579 年に生まれ 1625 年に死んだ劇作家で、一時はシェイクスピアと共同執筆もした経歴の人物であるが、1607 年以前の彼の経歴については不明である。こういう彼が世にあらわれると間もなくこの女王をテーマにした劇 *Bonduca*¹⁰⁸⁾ を作ったようである。彼はホリンシェドの *Chronicles* からの筋を土台にしてこの劇を書いた。*Chronicles* の第4巻の第10章から第13章はタキトウスやディオ・カッシウスなどの史家の記述を随所に引用しながらの可成り詳しい記述がこの叛乱についてなされている。「あの」¹⁰⁹⁾シェイクスピアがやはりこの *Chronicles* を元にして、しかもこの *Bonduca* の上演と同じ頃には *King Lear* (1605-6) と *Cymbeline* (1609-10) を作っており、特に 1606 年から 1616 年の間はこのような古い英国の歴史に対して劇作家の関心が向けられていたのであったから、シェイクスピアは何故この女王をテーマとした劇を作らなかったのか、*King Lear* 製作以前のまだエリザベス女王 Queen Elizabeth I の生存中にその劇を作ったが上演しなかったのではないか、などという不審や憶測がなされているが、それにはそれだけの理由はあるからである。特にエリザベス女王の時代には恰好のテーマであったように思えるためである。詩人の才覚ではボウディッカの最後はどのようにでも変えることも出来ることであり、幾多の困難な外交問題をかかえて、英国を狙う外敵と戦わねばならなかった女王の時代的背景にボウディッカをテーマとして劇作することは世の流れに敏感で、patronage を求めるに巧みであったシェイクスピアに好適であったように思えるためであ

る。しかしその解決の手がかりは何一つなく、不審は飽く迄も不審であり、また憶測も飽く迄憶測の域を出ないのである。

フレッチャーの *Bonduca* の上演は 1610 年もしくは 1612 年とされ、出版は 1647 年といわれる。構成は第 1 幕が 2 場、第 2 幕が 3 場、第 3 幕が 5 場、第 4 幕が 4 場、第 5 幕が 3 場で¹¹⁰⁾、総 2989 行から成る。場所はブリトンというだけで一切明らかでなく、出てくる地名はモナ島一つである (I.(ii), 419)。登場人物はブリトン側は女王 *Bonduca*、その娘 2 人 (下の娘にだけ *Bonvica* の名が与えられている)、女王の甥の *Hengo*、*Hengo* の叔父で女王軍の指揮官 *Caratack*、その部下の *Nennius*、その他従者、伝令、斥候が各 1 名と兵士たち及びドルイド教徒たち。一方ローマ側は *Swetonius* (これは知事の *Suetonius* のこと)、その部下の将校 *Petillius* (第 9 軍団の司令官 *Petillius Cerialis* のことで歴史上の綴りと同じ)、*Demetrius*、*Decius*、*Macer*、*Curius*、*Junius*; *Decius* の伍長 *Judas* と兵率が 4 名、*Penius* (これは第 2 軍団の司令官代理の *Poenius Postmus* のこと) とその部下の *Drusus*、*Regulus* とその兵率 3 名、その他に数名の兵士と伝令、斥候が各 1 名である。

この劇の上演は、シェイクスピアと組んで特に彼の劇の当代随一の名優であったバービィヂ *Richard Burbage* (ca. 1567-1619) とキングズ・メン *King's Men*¹¹¹⁾ によってなされた。劇の題名とちがって主人公は *Caratack* である。そうしてまたわれわれに感動を起させるのも *Caratack* の国を愛する崇高な精神と熱情であり、*Hengo* の哀しくも美しい死である。フレッチャーが女王を傍役としてしまったのは当時の時世によるものか——エリザベス女王の没後 (1603 年)、英国王ジェームズ一世となったスコットランド王ジェームズ六世 (SMB) の antifeminism によるためのものか、または名優バービィヂのためには女王の *Bonduca* よりも *Caratack* を主人公とせざるを得なかったためか、または何よりも興行上の利益のためには主演俳優を看板 (主人公) としなければならなかったのかも知れない。

この劇はこの後 1696 年、1706 年、1731 年、1778 年、1795 年、1808 年、1837 年と上演されている¹¹²⁾。

(B) ホプキンズ Charles Hopkins が押韻形式の劇 *Boadicea, Queen of Britain*¹¹³⁾ を書いたのは 1697 年であった。生没年が確かでなく 1664 年から 1700 年の存命とされている彼はエクセターで生まれ、間もなくアイルランドに移り、ダブリン Dublin で教育を受けた後ケンブリッジで学んだ詩人であった。彼はこの劇を同年ロンドンのリンカーンズ・イン・フィールズ劇場 Lincoln's Inn Fields Theatre¹¹⁴⁾ で上演した。これは各幕 1 場の 5 幕もので、ヴェルラムの町にはボウディッカの軍営があり、こゝから少し離れてローマの軍営があって両軍が対峙しているところから劇が始まる。

(C) 次に多作の詩人にして長詩 *Leonidas* で名を成したグローヴァー Richard Glover (1712-1785) が 1753 年に 5 幕ものの悲劇 *Boadicia* を書いた¹¹⁵⁾。構成は第 1 幕が 8 場、第 2 幕が 6 場、第 3 幕が 6 場、第 4 幕が 5 場、第 5 幕が 17 場となっており、これは 1753 年 12 月 1 日にドルウェアリ・レーン劇場で初演され、評判をよんで同月 13 日まで 8 回上演された¹¹⁶⁾。同時にそれはロンドンとダブリンで出版もされた。

上記 3 人の劇作家の書いたボウディッカ劇は共通した点を持っている。先ず既述のようにフレッチャーが *Chronicles* を土台として書いたものであったが、後の 2 人はいずれもこのフレッチャーのをもとにして作っている。3 つの劇ともブリトン側とローマ側の軍営が対峙しているところから始まるが、ホプキンズのを除いてはその場所が明示されていない。フレッチャーのでは第 3 幕で 2 人の娘が花をまき清めているなかをドルイド教の司祭が祈りの言葉を唱えながら生贄の準備をする場面があるがこゝは一つの climax であったと思われる。その台詞が書かれていないのでそれは多分言葉にならない呪詛の類であったと思われる。ホプキンズのにもボウディッカがドルイドの司祭に命じて彼等の勝利の神アンドラステに生贄を捧げる場が第 4 幕にある。こゝでは司祭の歌う言葉は台詞となっている。グローヴァーの *Boadicia* にはドルイドは出てこないがやはりアンドラステの女神に勝利を祈る場が設定されている。

このように劇の構成及び上演の評判を考え合せみる時にフレッチャーがは

じめてボウディッカをテーマとして作ったことに演劇史上大きな意義を見出すものである。

この他に *Boadicea Unearthed* と題するバレスクburlesqueがリックス Wilton J. Rix とギレット Fred J. Gillett なる人物によって 1895 年 1 月 29 日に上演された記録があるがこれ以上のことは不明である。

(D) ボウディッカの名を世に高めたのはクーパー William Cowper である。国を愛する強い心情に溢れたこの詩人は 1780 年に *Boadicea* と題する頌詩 ode を作った。彼は Boudicca の名を美しい音の Boadicea¹¹⁷⁾ と変えて、アメリカ独立戦争の最中にこの頌詩を発表した。彼はドルイドが単にローマの没落を予告するばかりでなく、ボアディシアの子孫がやがて輝かしい未来をたずさえて彼等の国の屈從せる運命を変え、その国を自分たちのものとすることの出来ることを歌わしている。

‘Rome, for empire far renown’d,
Tramples on a thousand states ;
Soon her pride shall kiss the ground——
Hark! the Gaul is at her gates!’

‘Regions Cæsar never knew
Thy posterity shall sway,
Where his eagles never flew,
None invincible as they.’

アメリカ独立戦争に対してのクーパーの国を思う熱情は無となったが、彼の詩は不朽の作となり今日も輝いている。

(E) 既に桂冠詩人となっていたテニス Alfred Tennyson はボウディッカ叛乱 1800 年記念の 1860 年に *Boadicea* を書いたがクーパー程の人気は得られなかった。テニスはこの詩をローマ詩人カトゥルス Catuslus¹¹⁸⁾ の難解な詩の調子を真似て書き、彼自身それを「実験」と名づけて可成り満足し、彼はそれをレコーディングする程にも野心的であった¹¹⁹⁾。しかし英詩は飽く迄も英詩でなければならない。いかに詩人自身は満足しようと英国国民の心に

ラテン語風の詩の訴る筈がない。余りにも作為的な彼の「実験」はまさに失敗であった。

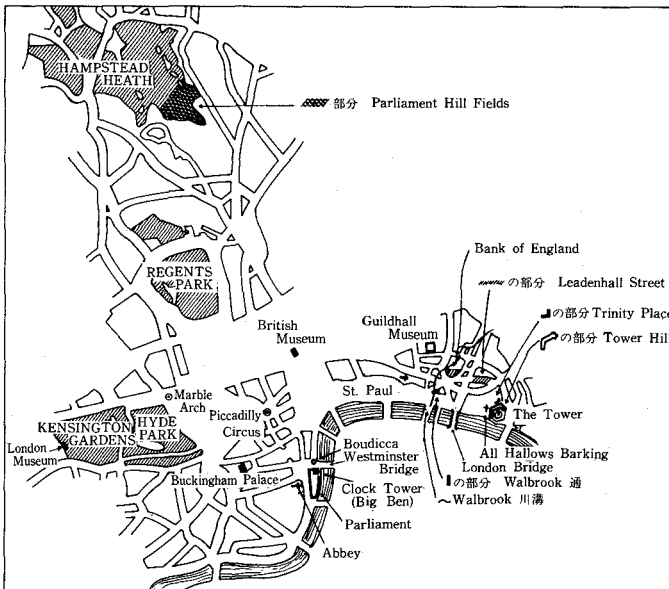
(F) この頃彫刻家のソニクロフト Thomas Thornycroft (1815-1885. 8. 30)がボウディッカをテーマにする仕事の着想を得ていた。彼は英国史に関するものの制作を王立美術院 Royal Academy から求められていたのであった。彼はすぐれた彫刻家でそれまでに既にアルフレッド大王 Alfred the Great¹²⁰⁾の像(1850年)などを数多く制作していた¹²¹⁾。彼はこれらの制作を通してアルバート公 Prince Albert¹²²⁾に接し、公からボウディッカのテーマを与えられたといわれる。彼は1850年代にこれに着手し、アルバート公はこの制作に多大の関心を寄せ、宮殿 Buckingham Palace¹²³⁾の王室厩舎 Royal Mews¹²⁴⁾からモデルとして数頭の白馬を貸した程であった。完成後は然かるべき所——ハイド・パーク Hyde Park の入口などに建てる計画があったが、公は死去した。制作中のその一部は1864年の王立美術院展に出品された。やがて像は完成したが彼のスタジオに置かれたまゝ、彼は1885年に亡くなった。その後パーラメント・ヒル・フィールズ Parliament Hill Fields にボウディッカの墓として伝えられるものをLCCが発掘し、子息のジョン John¹²⁵⁾がその場所を建立の地と選んだが、Society of Antiquaries¹²⁶⁾がその地はボウディッカと縁りなしとした。結局テムズ河畔ヴィクトリア・エンバンクメント Victoria Embankment のウェストミンスター橋 Westminster Bridge の西たもとが選ばれた。制作が始まって大凡半世紀を経た1902年であった。

しかし建立の時期は適当であった。英国は1852年にBurmese War(ビルマ戦争)、1857年にはIndian Mutiny(インド紛争)、1882年から1885年のエジプト及びスーダンの紛争、1885年再度のBurmese War、1899年から1902年までのBoer War(南阿戦争)と続いて国民精神の昂揚が求められた時期であった¹²⁷⁾。ソニクロフトの制作になるこの像は実物大より少し大きめのいわゆるHeroic sizeに感じられるブロンズ像で、イケニの女王は長いガウンをつけ、2人の娘を自分の両脇後方に従え、疾駆する2頭曳きの古代戦車¹²⁸⁾の上で両手は前方にかかげられ、その右手には槍が握られている。2人の娘は

第 6 図



第 7 図



何故か共に上半身が裸であるがボウディッカの脇後方から身をのり出す姿勢で、人馬共に躍如とした傑作である。この像にクーパーの詩が読まれる。

REGIONS CAESAR NEVER KNEW
 THY POSTERITY SHALL SWAY¹²⁹⁾

1066年のノーマン・コンクエスト Norman Conquest¹³⁰⁾以前英国はしばしば外敵の侵略を受け、占領され支配された。その時代その時代にそれぞれ外敵と勇敢に戦い、彼等を悩ました英雄のいた中で、ボウディッカがこのようなしばしば芸術作品となったことと、それらの作品の制作された時期がエリザベス治世の余韻の中とヴィクトリア女王治世の中で、しかもいずれも国難の時代であったことを知る時に、われわれは改めてイケニ女王の悲劇的運命とそれをテーマとした作品の意義とを思い合わせるのである。

(昭和50年5月14日受理)

(解)

A ボウディッカの叛乱はタキトゥス Tacitus,^{*1} スエトニウス Suetonius^{*2} 及びディオ・カッシウス Dio Cassius^{*3} によって記録されている。Tacitusはこの中で叛乱時に最も近いラテン史家でその記述に偏向が余りみられず、詳細でもあるので筆者は主にこれによった。

*1 Cornelius Tacitus. 史家であるが自己を多く語らず、生没年が確かでない。55年頃から127年頃とされる。行政官・軍人そして何よりも史家として有名。著書に *De vita et moribus Julii Agricolae*(Agricola), *Historiae*, *Dialogus de Oratoribus*(Dialogus), *Annales*, *De origine et situ Germanorum*(Germania) などが残る。

*2 Gaius Tranquillus Suetonius. 69年頃から140年頃のラテン史家。多くの著書を残したが *De vita Caesarum* が有名。これはアウグストゥスから12人の皇帝伝である。この叛乱はネロ皇帝の巻で僅かに記録されている。本論でこの著作を引用の際にはただ *Nero* とした。

*3 Dio Cassius Cocceianus. 150年頃から235年頃が生没年とされるギリシア系のローマ行政官・史家。『*Ῥωμαϊκὴ ἱστορία* (Ῥωμαϊκά)』80巻を着わしたがその記述にいささかの偏見(誇張とか、人は読んでも口には出せないような下品な描写など)が読まれる。本論中に Dio Cassius とあるのはすべてこの *Ῥωμαϊκά* からの引用である。

B 有名な人物など(e.g.アウグストゥス)の注は省いた。

C 表記・発音に幾通りもあるもの(e.g.ローマ時代のStrasbourgは24通りの表記がある。Glasgowの発音も数通りある)は代表的なものにした。

D 固有名詞は初出の時に日本語と原語を並記したが、2度目からは日本語表記のみとした。但しテキスト、文献の著者名、劇中人物名、俳優名などは日本語表記をしなかった(特に注では)。有名な名でどちらかの表記を省いたのがある(e.g.コロンブス)。また同一人物でもe.g.カエサルとあるのはそれは記述の中であり、Caesarとあるのは著者としてである。

E MS(S)はmanuscript(s), LCCはLondon County Council, LCLはLoeb Classical Libraryの略である。SHE, SMB, SJCは拙稿の「『ヘンリー八世』地誌考」, 「『マクベス』地誌考」, 「ジュリアス・シーザー』地誌考」参看のことである。

F Bede, Caesar, Dio Cassius, Plinius, Seneca, Suetonius, Tacitusのテキストは主にLCLを使った。

(注)

- 1) Boudicca.この綴りはTacitusによって初めて記録された(*Annales, Agricola*)。しかしエジンバラ大学のケルト語学者K. H. Jackson教授は'cc'という形はおきえないので正しいとは認められない。'c'は1つで足りるとしてBoudicaを採用している(p.306ff., p.572ff.)。ケルト語学者の最も認める綴りはBoudicaだとLloydという(p.55, n.24)。Suetoniusには記録なし。Dio Cassiusは *βουδούικα* と記録。しかし15世紀のVaticanus及びCoislinianusのMSSの中にはこの綴りの他に *βοδούικα* と綴ったのが1ヶ所ある(LXII-6)といわれるが、筆者が大英博物館 British Museum でみたVaticanusのMSにはLXIIの巻がなく確認は出来なかった。Bede(注90)には記録なし。14世紀に書かれた英国の年代記 *De situ Britanniae*^{*}はBonduicaと記録している。また通常単にHolinshedまたは *Chronicles* というだけで通ずるホリンシェドRaphael Holinshed(またはHollingshed. ca. 1580年没)の編した有名な年代記 *Chronicles of England, Scotland, and Ireland*(第二部参看)の中ではVoadiciaとなっている。ヴィクトリア時代になって詩人のクーパー及びテニスン(いずれも第二部参看)がこれを美しい口調のBoadiceaと変えた(Trevelyan, p.19)が、歴史家はこれを認めず(Henderson, *Nero*, p.477; Chambers, p.30),中には綴りの間違いである(Mattingly, p.164)とか、全然問題ともしない(Collingwood, *Roman Britain*, p.23)史家もいる。Lloydはこの綴りはいかなるMSにも見出されないと述べている(p.55, n.24)。美文家のギボンE. Gibbon(1734.4.27-1794.1.16)はさすがにBoadiceaと綴り、またこれと同じくCaractacusを採用している(注52)。今日一般の英国人はBoadiceaで理解している。いづれにしてもこの名の意味は'victory'から派生している。

* *De situ Britanniae* は通常その名に生地の名をつけてサイアレンセスターのリチャードRichard of Cirencesterとよばれる人物の残した年代記で長い間ローマン・ブリトンの権威ある書とされてきた。彼は凡1335年にサイアレンセスターに生まれ、1350年または1355年にはウェストミンスターのセント・ピーター St. Peter 教会

(今日のウェストミンスター・アビー Westminster Abbey)のベネディクト修道士となっていた。彼は修道院長の許可を得て、1391年から1397年の間のいづれかの年にローマ(イエルサレムともいわれる)に旅したと伝えられるが詳細は一切不明である。1401年セント・ピーター教会の病院で没した。この年代記は2部から成り、この国が大陸から見えるケントの海岸が白い崖をなしているために古代から'Albion'とよばれるということから書き始まり、知事のルプス Virius Lupus がハドリアヌスの城壁 Vallum Hadriani(ハドリアヌス時代の122年から数年を要して築かれた英国の万里の長城。狂暴なスコット族 Scots やピクト族 Picts の南下を防ぐためのもので、ポンス・アエリウス Pons Aelius (今日のニューカッスル Newcastle upon Tyne) からルグヴァリウム Luguwallium (今日のカーライル Carlisle) まで英国を東西に貫いた城壁)を修理した後、間もなくエブラカム Eburacum (今日のヨーク York) で没し(ルプスは197年か198年にブリタンニア知事となり、この修理はその年から208年までかゝったといわれる)、その後 Alexander, Lucilianus, M. Furius, N. Philippus と知事の続いたことをその名で列記するだけで第2巻26章となり、この章がただ *Post...* となって何も記されないで (*Desunt reliqua*) この年代記は終るのである。この他に彼にはウエストミンスター・アビーについての記録は貴重なものとされる *Speculum Historiale de Gestis Regum Angliae, 447—1066* の著書がある。

- 2) 当時イケニ王国は金属の産はなかったが農業・牧畜の生産物の豊かな国であった。こゝで当時の諸部族についての歴史的背景を記しておく。

紀元前500年頃からケルト諸部族 Celts が相次いでブリタンニアに渡来した。彼等はずもともとアルプス以北のヨーロッパ中央及び西部に広く分布し、古代ギリシア人によってケルトイ *κελτοί* とよばれた長頭・長身・金髪・碧眼の「北方系」の人種であった。紀元前7世紀頃から徐々に、または継続的に民族移動を起して西進し、その一部がブリタンニアに侵入し、紀元前1世紀までにこの島の東南部の低地地方から北西部の高地地方までを占め、更にアイルランドまで征服するに至った。彼等は牧畜生活を営む好戦的種族で、先住部族はもとより仲間同士の戦争さえ好む連中であつた。しかも紀元前500年から同250年の間に渡来したケルト部族は鉄器文化を既に有し、更に紀元前250年から同75年に渡来した部族は一層高度の鉄器文化の所有者で先住民を徹底的に支配した。紀元前75年から渡来した部族はユリウス・カエサル Julius Cæsar によってベルガエ人 Belgae とよばれていた部族で、彼等はガッリア・ベルギカ Gallia-Belgica (今日のベルギー地方) にあつて紀元前2世紀頃ゲルマン人と混血した部族であつた。ブリタンニアに渡来して彼等は先住部族を圧えてタメシス河の北岸一帯に定住し、そこにカッシウェラウヌス Cassivellaunus なる者が王となつてカトゥウェラウニ族 Catuvellauni に君臨し、ベルガエ王国を建設した。そこは現今のハートフォードシャー Hertfordshire, バッキンガムシャー Buckinghamshire 及びバークシャー Berkshire の辺りで、都は今日のセント・アルバンズ St. Albans の西ヴェルラミウム Verulamium (今日のヴェルラム Verulam) と推定される。彼等は絶えず大陸のガッリア(注63)の部族と連絡を保ち、彼等のローマ支配への反抗に援助を与えて

いた。このことがカエサルのブリタンニア遠征を導いた原因の一つであった。またこの遠征でこの島に上陸したローマ人が最初に接したケルト人も彼等ベルガエ人であった。カッシウェラウヌスはカエサルの第1次ブリタンニア遠征(紀元前55年夏)に抗戦し、更に翌年夏の第2次遠征に対してはブリタンニア諸部族の総指揮者となって抗戦したが、その結集が続かず(注52)、遂に降服したのであった。

紀元前75年の渡来におくれること約20年の前52年から前51年頃にローマに反抗してこの地に敗走してきたベルガエ人のコンミウス Commius が南部に今一つの王国を建設した。彼はかつてカエサルの信頼を厚く得ていたカッシウェラウヌスの降服を仲介した男でもあった。この2つのベルガエ王国のうち前者を東ベルガエ王国、後者を西ベルガエ王国と称する。ローマ人は彼等をブリタンニ Britanni と名づけたが、これは彼等が身体に入墨をしていたか、身体を青く彩っていたためであった(Julius Caesar, *De Bello Gallico*, V-14)。そこでローマ人はこの国をブリタンニア Britannia と名づけた。

ベルガエ人は先住のケルト人をその進歩した文化で圧倒し、特に農耕技術にすぐれて、従来のケルト人の農業生産を凌駕して優位な支配的階級となった。彼等はすぐれた農夫・戦士・組織者であった。中でも特に東ベルガエ王国のカッシウェラウヌスの孫タッシオヴァヌス Tasciovanus の勢力が強く、西ベルガエのコンミウスの息子ヴェリカ Verica を圧倒していた。更にタッシオヴァヌスの子のクノベリヌス Cunobelinus はローマ化の姿勢をみせ、紀元5年頃から40年頃に至る長い治世の間に東隣のトリノヴァンテス族 Trinovantes を征服し、カムロドゥヌム Camulodunum(今日のコルチェスター Colchester. ロンドンの東北約80 km)を中心に城塞を築いて都をヴェルラミウムから移してブリタンニア南部一帯に広くその勢力を張り最強を誇っていた。この他にイケニ王国、ドブーニ王国、ブリガンテス王国などが割拠していた。

- 3) この綴りも Tacitus が最初である。Richard は Præsutagus と記録している。この王については生没年・容貌・性格など多くが不明である。ただ治世の期間が長く、その間に大きな財産を得た富裕な王であったことを多くの史家が推定している。都はヴェンタ・イケノルム Venta Icenorum であつたらしい。この Venta のつく地名はローマン・ブリトン当時この他にヴェンタ・ベルガルム、ヴェンタ・シルルムがあった。Venta の意はかつては、ラテン語の *vendere* 'to sell' から生じ、market town を意味し、Venta Belgarum(今日のウィンチェスター Winchester) は market town of the Belgic tribe であり、Venta Silurum(今日のカーエルウェント Caerwent) は market town of the Silurian tribe であり、そして Venta Icenorum が market town of the Icenic tribe であると説明されたが、今日のケルト語学者はこの説を退けている(Copley, p.15)。さて Venta Icenorum は今日のノリッチ Norwich(またはノリッチ)の南カイスター・セント・エドモンド Caistor St Edmund(s)(または Caister St Edmunds)であると推定される。当時こゝに濠をめぐらした高さ6 m、厚さ3.3 mのかなり頑丈な城壁があつたが、5世紀初期サクソン族の侵入で壊わされたといわれる。

彼とポディッカとの結婚の年も不明であるが、2人の娘の年令（これがまた推測である）からそれが早くも43年、おそくとも45年とされる程度である。ポウディッカに比して影のうすい人物である。

- 4) 注3の如く不明。59年、60年、61年との諸説がある。Richmondは59年か60年、あるいはそれより早い早い時期かも知れぬと述べている（*Roman Britain*, p.29）。
- 5) Tiberius Claudius Drusus Nero. 前10.8.1—後54.10.13, r.41—54. 身体上の欠陥のため幼時から患者扱われ、母親すらがしばしば「化物」とよぶことがあった。41年1月24日カリグラ（注11）が暗殺されて騒然たるローマのパラティヌスの丘 Mons Palatinus(SJC)の宮殿奥深い部屋のカーテンの陰に両足をはみ出したまゝ、身の危険を感じて震えながら息をひそめていたカリグラの叔父、すなわちこのクラウディウスを近衛兵が見つけた。一方元老院は後継皇帝の選出に結論を出せずにいた。これに先んじて翌25日近衛兵は彼を皇帝に選んだが、彼自身は旬日の間絶えず本当に自分が皇帝なのかと周囲の者にききただす程全くの偶然のことであった。彼は血統上では申し分がなかったが、50歳を過ぎても軍歴も公職も経験することなく、元老院に議席も持たなかった。彼の公職といえただ一度だけ執政官となったが、これは元老院が彼を笑ひ者にするためのひやかしからのことであった。彼は無為徒食、酒とギャンブルに明け暮す遊惰な貴族とされたが、一方には歴史研究に情熱を燃やし多くの著作をなしたと伝える向きもあるが、今日その著作なるものの一片だに伝わらないのである。異変の中で全く思いがけなく皇帝となった彼はその身分にも拘らずしばしば公然と馬鹿にされ、またそれだけの陳腐噴飯の行動が多々あったが、対外関係に力を入れて属州統治に積極的であった。これは軍歴のない彼にはどうしても軍事上の勝利が必要であったからである。これによりブリタンニアとトラキア Thracia（今日のバルカン半島東部）を新たに属州とするなど初代皇帝アウグストゥス以来の壮拳をなしローマは発展を示した。彼が新たに迎えた妻アグリッピーナ（注9）はクラウディウスの実子ブリタンニクス Britannicus をさしおいて連れ子のネロ（注9）を皇帝とするため帝の毒殺を計画した。凶行は10月12日夜決行されたが帝は毒がまわらぬうちに吐瀉したため一時失敗した。彼女はすぐ侍医にいいふくめ毒のついた鷲鳥の羽毛を帝の喉奥につつませた。帝は悶絶し10月13日朝、陽が昇った時には自分の寝台の上に運び込まれて64歳の命が切れていた（注9）。

ブリタンニアはカエサルの頃から既にその資源——奴隷とする人間をも含めて金属・穀物・家畜に富むことをローマは知っていてこの地の征服はカエサル以来の課題であった。特に軍歴のないクラウディウスには恰好のものであった。彼は43年秋にブリタンニア遠征を行った。4軍団（注44, 46, 64, 74）と補助隊（注45）を加えた約50,000の兵が動員され、出発地点はゲソリアクムの港 Gessoriocensis portus（今日、フランス西海岸カレー Calais のすぐ南ブローニュ Boulogne でカエサルの遠征もこゝからなされたといわれる）で、上陸地点はルトゥピアエ Rutupiae（今日のリッチバラ Richborough）であった。上陸後については注47にあるが皇帝は16日間この地にあつ

てローマに凱旋し、遠征の成功を記念してローマのマルスの野 Campus Martius (SJC)に凱旋門を建て、更に息子に'Britannicus'の名をつけた。

6) 注2参看。

7) クライアント・キングの身分はローマが属州支配の一方策として制定したもので古い歴史をもつ。かつてアテナイ Athenae の競争相手でもあったシラクサーエ Syracusae (イタリアのシチリア島 Sicilia 東岸の都市で今日当時の遺跡・芸術品が多数みられる)が第一次ポエニ戦争(前264—前241)でローマの干渉を受け、その王ヒエロ Hiero がクライアント・キングになったのが初まりとされる(前263年)。この身分はいわゆるローマの友という名目ではあるが、飽くまで王を奴隷制の手段として扱うものであった。それは丁度奴隷が主人に、貧しい平民が貴族に属するのと同じで、金と食物(生活)が与えられるその代償として彼等にはローマに奉仕する義務が幾多であった。ブリタンニアでは54年頃までにサセックス Sussex のレグニ族 Regni の王コギドゥップヌス Cogidubnus と、プラスタグスがクライアント・キングとされ、特に前者はクラウディウスからブリタンニアの王 *rex (et) legatus Augusti* の称号を与えられ、また彼は Tiberius Claudius Cogidubnus というローマ名をもつローマ市民とさえた。次いで今日のヨークシャー Yorkshire 一帯を支配していたブリガンテス族の女王カルティマンドウア Cartimandua (注47)をローマはクライアント・キングとした。これはブリガンテス族がイケニ族と同様極めて好戦的な部族であったから支配の手段としてクライアント王国としたのである。それだけにブリガンテス族及びかつてカルティマンドウアの consort のヴェヌティウス Venutius はしばしばカルティマンドウアを廃する計画をたてローマに反抗した。その都度彼女はローマの助けを求めねばならなかった。クライアント・キングは勿論カムロドゥヌムのローマの都、すなわちローマの支配を認めそれに服従するものであった。クライアント・キングの身分制度についてのローマの考えはその王個人一代だけのローマとの「特別な間柄」*ad hoc* であって、王国そのものを対象としていなかった。故にもし、そのクライアント・キングが死んだような場合——ローマの都合で廃位させることもある——にはローマはその王国の取扱いを「新たに」*de novo* に考え直して自由に変更することが出来た。この制度はクラウディウス帝の頃に次第に薄らいできており、レグニのコギドゥップヌスは40年以上にわたってその身分にあったにも拘らずその死と共にこの王国はローマの属州とされてしまっていたから、残りのイケニとブリガンテス両国がクライアント王国としての命数が幾何もないことは明らかであった。

8) 2人の娘についても名前・生年すべて伝えられていない。尤も古くから女の名は記録に残らないか(単に某の娘)、残っても呼び名一つ(今日でいえばクリスチャン・ネーム)でその氏がわからぬことがあり、また母娘・姉妹が同名というのは沢山あった。叛乱当時の彼女たちの年令も不明であるが、2人がローマの役人に凌辱されたと伝えられた (*Annales*, XIV—31) ことがいささかの議論をよぶのである。このようなことを詮索するのは科学としての歴史の任務ではないと Dudley は述べながらも、下の娘

が12歳から14歳位、上のがその1歳年長であったらうと推測し、2人はこの叛乱には政治的には未だ年若くて無力であったが 'old enough to be raped' と述べている (p.48)。

- 9) Nero Claudius Caesar Augustus Germanicus. 37.12.15-68.6.9, r.54-68. ローマ皇室の系譜は複雑であるがネロの場合は特に複雑である。それは彼の母のアグリッピーナ Agrippina の複雑さにある。彼女の父方の祖はアントニウスであり、母方の祖は初代皇帝アウグストゥスであるからローマ帝国の統首をかけて争った2人の血が因果なことにもこのアグリッピーナにおいて合流している。また彼女の祖母のユリアは一代の淫婦でその放埒ぶりには父アウグストゥスも家長権を発動して娘をパンダテリア島(注36)に流さざるを得なかった程であった。ユリアの淫乱な性格はアウグストゥスを遡ってユリウス・カエサルにあらう。そうしてカエサルもアントニウスも共にクレオパトラを妻とし——カエサルは彼女に子種を与えた——、しかもクレオパトラはエジプト女王ながらも純粋なギリシア人であったから、ネロのギリシア趣向の因はこの辺りに潜んでいたのかも知れない。淫乱な父方・母方の性格はアグリッピーナの兄弟姉妹にあらわれ、彼等の相姦(注11)やアグリッピーナとネロとの母子相姦(?)にあらわれている。アグリッピーナは父ゲルマニクス Germanicus Julius Caesar (前15-後19, 軍隊の信望極めて厚く、ためにティベリウス帝により暗殺された?)の任地であったローマの植民地オピドム・ウビオルム Oppidum Ubiorum で15年11月6日に生まれた。この地は彼女の誕生を記念してコロニア・アグリッピネンシス Colonia Agrippinensis と名づけられた。今日のケルン Köln の名の由来である。さてネロはこの母と、無謀放埒で信頼がおけないことで悪名高い家系のアヘノバルプス Cnaeus Domitius Ahenobarbus との間に生まれた。母のネロに対する異常な桎梏は史上有名なものであるが、それは *Child Harold's Pilgrim* の作家で数奇な生涯を送った詩人バイロン卿 Lord George Gordon Byron とその母との関係を憶い出させると Tucker は述べている (p.75)。

ネロは生後9日目にカリグラの前で Lucius Domitius Ahenobarbus と名づけられたが、ネロを皇帝にしたいという異常な野心に燃える彼女はその後クラウディウス帝と結婚し、50年2月25日に帝はネロを正式に自分の息子と認めて、その名は Tiberius Claudius Nero Caesar と改まった。更に異例なことにも14歳にもならぬ51年3月4日には元服し、元老院に正式に紹介されてプリンケプス・ユウェントゥティス *Princeps Iuventutis* 「若者の第一人者」という輝かしい名誉ある称号を授けられ、その名も一段づつ立派なものに改められて Nero Claudius Caesar Drusus Germanicus となった。クラウディウスの毒殺が行われ帝は10月13日朝には既に死亡していたが、宮殿のト占師はその日は正午以外の時刻はすべて凶兆を示していると告げたので、ネロの皇帝宣言は正さに正午きっちりに行われた(その間死せるクラウディウスは生きているかの如き姿勢を保たされた)。以来68年6月9日、「世界は何というすぐれた芸術家を失うことか」 *Qualis artifex pereo!* (Suetonius, *Nero*, XLIX) という言葉を残して死

ぬ迄の14年間の治世のネロにわが国では「暴君」の名を冠している。ネロよりも幾倍も残酷で暴君であったアウグストゥス、ティベリウス、カリグラには一向に「暴君」の名がつかないことから判ずると、これはネロがローマの大火の失火の責任がキリスト教徒にあるとして彼等を多数処刑したことによって、後世キリスト教徒の著作者が彼を極悪人とする著作を積み重ねてきたことによるのであろう。しかしネロは戯れや理由なく人を殺害することなく、婦人に対する愛情も真摯で淫乱に耽けることなく、芸術精神に溢れた真の平和主義者であって、Suetoniusは「彼は帝国の属州を増やそうとしたり、国境を広げようとするいかなる願望や期待に心が奪われることはなかった」(Nero, XIII)と述べ、Bedeは「ネロは軍事について何もすることなく、それがためにローマ統治における他の数え切れない損失の一つにブリタンニアを殆んど失った」(Historia I-3)と述べているようにネロは自分から軍事上の統率者とも征服的英雄とも思われたいという望みを抱かなかった。それどころか彼は67年11月28日に全ギリシアに自由を与えるという前例のないことまで行ったのである。ローマの町が健康的に近代化したのは彼の力であった。ただ彼は18ヶ月もの間、国を空けて演奏旅行をし、皇帝としての義務・名誉を失うようなことをしたのは事実であったが、それが何も人間ならぬ怪物でもなければ、極悪人としての暴君となるとは思えない。

- 10) Tacitus, *Annales*, XIV-31.
- 11) Gaius Julius Caesar Germanicus. 12.8.31—41.1.24, r.37-41. アグリッピーナの兄。綽名のカリグラでよばれることが多い。これは彼が幼時から履いていた軍隊靴に由来する。37年春民衆の歓呼の中で皇帝となった当初は民主的な善政とも思えるものであったが、7ヶ月後重患となり、回復後も精神的疾患が癒らず、以来性格が一変し、有力者を理不尽に次々と処刑するといった残酷さや、インキタトゥス Incitatus という愛馬に紫の毛氈を敷きつめた大理石の厩舎を建て、その飼葉桶は象牙で作られ、その馬を執政官にせよと要求するような狂人ぶりと浪費に変貌し、またローマ皇帝はアウグストゥス以来自らを神格化する傾向にあったが、彼は特にヘレニズム風の現人神の妄想にとりつかれて神と自称して公式の場に現われ、また実の姉妹たち——この中にはネロの母のアグリッピーナは勿論含まれる——と近親相姦を犯し、中でも特にドルシラ Drusilla に対する熱愛は異常で、既に結婚していた20歳のこの妹を夫と離別させて自分と一諾に住まわせ、38年彼女が死ぬと彼は自殺せんばかりの落胆の呈であったが、彼女の黄金の像をたて Diva Drusilla の名を与えて神格化することによってようやく慰めを得たといった狂気ぶりであった。彼の最期は当時としては珍らしくも陰謀によらぬ偶然から近衛の將校カッシウス・カエレア Cassius Chaerea に斬りつけられ、他の將校たちの手で八つ裂きとされた。傷は30ヶ所を数えたといわれた。妃のカエソニア Caesonia と幼い娘もこの時殺された。41年1月24日、29歳の宵の出来事であった。

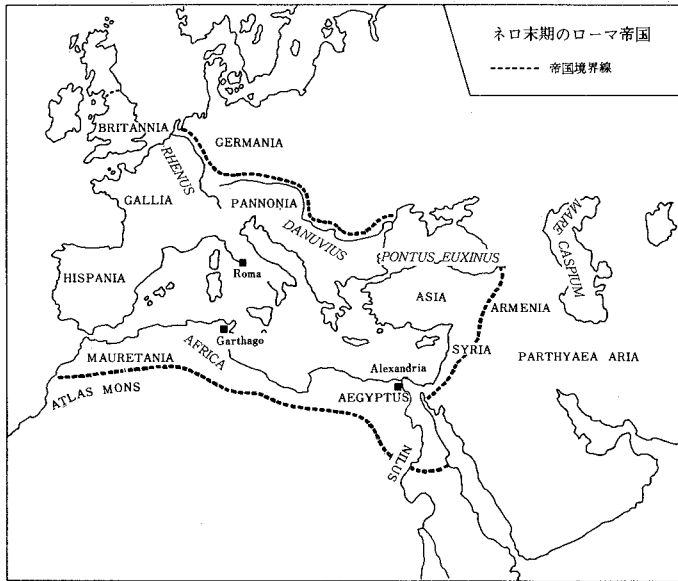
カリグラは40年春ブリタンニア遠征を計画し、大軍を北ガリアの海岸まで進軍させた。こゝで彼はブリタンニアから追放されてきたアミニウス(注47)と会った。

カリグラは突如この計画を放棄し、軍隊に軍帽に海岸の貝殻を拾えと命令し、それを携えてローマに帰還した。これが彼のブリタンニア遠征の戦勝記念品であった。この計画放棄は、軍隊が海を越えてブリタンニアに遠征するのを拒否したためか、彼が留守中のローマの動静を心配してからのことか、またアミニウスの臣従で遠征の目的は達したとでも考えたからかはいづれも不明である。カリグラの茶番劇といわれるものの一つである。

彼の浪費を伝えるものの一つにネーミ湖 Lacus Nemorensis の2隻の船がある。ローマの南東約30km、緑の丘アルバン Mons Albanus に囲まれて、その崖下に静かに横たわって古来「ダイアナの鏡」*Speculum Dianae* とよばれたこの美しい湖——こゝはまた古来 Rex Nemorensis とよばれる司祭にして王たる者の住む所といわれ、フレイザー卿 Sir James George Frazer (1854.1.1—1941.5.7) は有名な *The Golden Bough* の大著の冒頭をネーミ湖の神性で飾っているが、この湖の底に沈んでいた2隻の大型船はカリグラの建造になったものである。1928年10月20日、時の宰相ムッソリーニ Benito Mussolini (1883.7.29—1945.4.28) の手でこの船の引上げ作業が開始され、4年以上の歳月を要した後引上げられ今日湖畔の博物館にあるが、その大きさは横梁の幅が1隻は20.1m、もう1隻は23.8mで、これはコロンブスがアメリカ大陸発見に使った3隻の船の最大のサンタ・マリア Santa Maria (もとの名は Marigalante. 長さ約35m《overallで約38.5m》、幅7.7m) の約3倍に当るもので、船体は絵タイル張り、甲板には多彩な大理石が敷きつめられ、柱も大理石といった豪華なもので、さしづめ湖上に浮かぶ宮殿であった。カリグラは前帝ティベリウスの遺した2,700,000,000 セステルティ *sestertii* (3,300,000,000 セステルティともいわれる) の金を1年間で費い果した浪費狂であった。この *sestertius* という当時の金を今日の金に換算することは極めて難かしいが、極めて大雑把な試算をしてみると1 *sestertius* は約30円に相当しよう。しかも金の価値は現今より当時の方が大きいことを思うとわれわれにはとても信じられない大金を費い果したわけである。

- 12) 単にローマと記されていてもそれがローマ皇帝・ローマ政府・ローマ帝国などを広義に指している場合とローマ市を指す場合との混同はないと思う。
- 13) 注9 参看。
- 14) Suetonius, *Nero*, XVIII.
- 15) ネロのこういった事例をあげれば際限がないようなものであるが、例えば66年、パルティア Parthia の王の息子でアルメニア Armenia の王位に就いていたティリダテス Tiridates はネロに招待されてローマに来たが、彼をもてなすのにネロは数日間にわたり1日に800,000 セステルティの莫大な金を使ったといわれる。しかもティリダテスが10,000人にもものぼる従者を伴って自国を出てローマに着くまでの9ヶ月間の旅の一切の費用はローマが負担し、帰国に当っては莫大な品物と現金が贈られたのであった。(この両国は共にローマにとってそれまで最も危険な国であったが、この後は友好関係がつづいた)。ネロが日常の些細なものに使う金も大きく、彼は同じ服を2

第8図



度と着ることなく、魚釣りに黄金の網を使い、旅行に出る時の馬車の数は1,000台を下ることなく、銀の脊をはいた馬や騾馬が真紅の服の御者に御されての行列は数kmに及ぶという豪華さであった。

- 16) この事実を明確に伝える文献がなく僅かに触れる文献もプリニウスの記述(次注)の繰返しに過ぎない。ただ叔母のドミティア Domitia を殺したことが疑われている。
- 17) 信憑性がなく伝説ともいわれる。プリニウス Gaius Plinius Secundus(23または24-79) がその著 *Historia Naturalis* XVIII-vii-35 でこれを伝えた。彼はネロに対する反乱の一味で、これはネロの死後彼への誹謗から出たものと思われる。別説では彼はこれを Ain-el-Djemila(アフリカの地名らしいが現在の筆者には不明)の碑文から得たとされる(Grant, *Nero*, p. 261)。彼はこゝでアフリカの半分 *sex domini semissem Africae possidebant* と記したのは表現上の文からか、または当時の地理知識の不足からかと思われるが、これがどの程度の広さであったかは不明である。ただいえることは Plinius の表現とは可成りかけ離れた広さ(狭さ)であったということである。彼は79年8月24日、ネアポリス Neapolis(ナポリ)近郊のヴェスヴィウス Vesuvius 火山の大噴火の観察に赴いて遭難した。
- 18) 今日ローマに廃墟として残る有名な大円形劇場コロッセウム Colosseum(綴りは幾通りもある。当時はフラヴィオの円形劇場 Amphitheatrum Flavium といわれた)のすぐ北東の丘にこの宮殿が建てられ、今日僅かに遺跡となっている。面積約50万平方

メーターと伝えられ宮殿はすべて黄金で敵われ、内部は多くの壁画とギリシアから持ち運んだすぐれた彫刻で飾られていた。コロッセウムの地は当時この宮殿の人工池であった。

- 19) 生地ではエリサ Elissa とよばれた。富裕と悪徳で名高い古代フェニキアの都タイア Tyre (今日のレバノン Lebanon) の王マトン Mutton (前 70 年から前 19 年に生存したローマの有名な詩人ヴァーギル Publius Vergilius Maro Virgil の書いたアエニード *Aeneid* の中ではベルス Belus の名) の娘といわれる伝説上の人物で、カルタゴの創設者として有名。彼女は莫大な財産を有する叔父アケエルブス Acerbus (*Aeneid* ではスィカアエウス Sichaesus) と結婚したが、彼女の兄のピグマリオン Pygmalion が王位を狙ってアケエルブスを殺害したので、彼女はその富を持って船でタイアからキプロス Cyprus, 更にアフリカに逃がれた。「さまよえる者」の意のデイドの名はこゝから生れた。彼女はそこにカルタゴの市の基となった砦を建設した。彼女は近隣の王の求婚から貞節を守るために積み上げた薪の上で自らを火葬したといわれる。
- 20) ネロはこのことに非常に失望し、神経が焦立っていて些細なことに立腹し妻のポッパエア・サピナ Sabina Poppaea の腹を蹴り、そのために身重の彼女は流産し、彼女自身もそれが因で死んだ——極端な話ではネロはポッパエアを蹴殺したといわれるが真実ではない。尚彼女は皇妃となる前はネロの親しい友人オト Marcus Salvius Otho (32-69. 4. ネロの死後 3 ヶ月間皇帝となった) の妻でネロよりは 6, 7 歳年上であったが、その比類のない美貌に魅かれたネロは、オトにポッパエアを今後は名目だけの妻とみなしてくれるように頼んだ。オトは出世の野心の方が強かったのでそれを承諾してルシタニア Lusitania (今日のポルトガル) の知事として 58 年ローマを去った。ポッパエアは夫と愛人との区別を立てる能力に欠けるような軽佻・不道徳な素質とは別に高尚な芸術趣味・教養・優雅という素質をも兼備していて、ネロの芸術的発展を力づけたが、何よりも大きな影響を与えたのは彼女の豪華さ・贅沢さに対する趣向であってこのためにネロの浪費に更に大きく拍車がかかった。
- 21) 注 2 及び本文後出。
- 22) Arnold は特にこの点を重視している (p.67)。
- 23) Quintus Veranius. 49 年既に執政官となっていた彼は 57 年または 58 年に知事となったが、積極性を欠き、僅かにシルレス族の領地に名目だけの進軍を命じただけで、それ以上の討伐・征服という手段はとらなかった。そうしてその年のうちに死亡した。
- 24) このようなローマの官職名その他に対して日本史学界が定着させている訳語を現在の立場の筆者は把握出来ないので暫定的なものとした。
- 25) 経歴はよくわからない。本文後出のようにロンディニウムからガッリアに逃げたが、その後のことも不明。
- 26) 金のことである。最近の研究によるとクラウディウスはそれを彼等に与えることによってブリタンニアのローマ化が促進されるものと思ってのことであったとされる。
- 27) 注 8 のように 2 人の娘の歳を推測すれば 1 歳ちがいの 14 歳頃である。Tacitus の記

録に従って多くの文献は彼女たちが凌辱されたと記しているが、Weigall だけはいささか違った表現をえらび「ローマの将校に彼女たちは抵抗出来ない魅力を感じてしまったのだらう」と述べている (p.175)。

- 28) この年代を斯界の権威 Henderson は 51 年としている (p.206)。
 29) Publius Ostorius Scapula. 47 年秋二代目知事としてブリタンニアに赴任。騎兵隊出身の精力的人物でイスカ・ドゥムノニオールム Isca Dumnoniorum (今日のエクセター Exeter) の辺りから東北にアクアエ・スウルス Aquae Sulis (今日のバース Bath), コリニウム・ドブノールム Corinium Dobunnorum (今日のサイアレンセスター), 更にラタエ Ratae (今日のレスター Leicester) を通ってリンドム Lindum (今日のリンカーン Lincoln) に至る境界線を設け、この線の内側の諸部族を平定するなど統治に極めて積極的であった。この線が後にフォス・ウエイ Fosse Way と称される道路である。

彼は 9 年間にわたりローマに抗戦を続けたカラタクス (注 47) をようやく捕えローマに送ることが出来た。元老院はその功績に *triumphi insignia* (凱旋將軍頭賞) を決議して彼にそれを与えたが、Tacitus が「これまで晴やかであった彼の運命は今やかげり出して」*prosperis ad id rebus eius, mox ambiguus* (*Annales*, XII—38) と記するように、たしかにスカブラはカラタクスこそ討ったが、このためとシルレス族の平定のための度重なる心労に精根つきてこの地で 52 年亡くなった。

- 30) 本文第二部参看。
 31) 注 2 及び 47 参看。
 32) 注 2 参看。
 33) 属州の税金そのものは重いものではなかった。税金は土地所有者全員にかかる *tributum soli* (といわれる土地税と *tributum capitis* (資産税) が主であった。この他に *portoria* (関税) と、主として穀物にかかる *annona* というのがあった。ただブリタンニアのような穀物生産地と更に 50,000 という多数のローマ軍隊の駐屯しているところではこの *annona* が住民には可成りの負担であった。しかもローマの役人は私腹を肥やすための極めて「汚い」やり方をしたので、それが住民の負担をこの上なく重くした。Tacitus は *Agricola* の中で、これが現地人には課税そのものよりも堪え難いものであったと述べている (XIX)。Tacitus のこの記述はこの叛乱後 30 年以上経ってのものであるが、その実情は 30 年以前も変わりはなかった。カータス・デシアヌスは本文に述べたように非情な方策をとったので住民との摩擦を起こしていた。ブリタンニアの住民は Tacitus が述べるように、ローマの統治権が自分たちに課する兵の徴集や貢物その他の義務が酷いものでなければ、それを拒むものではなかった (*Agricola*, XIII)。ローマの役人が私腹を肥やすその汚いやり方というのは次のようなものであった。先ず割当量の穀物を供出出来ない者はローマ政府の穀物倉庫の前に並べられて、彼等役人の差出す穀物を住民は欲しくもないのに役人のいいなりの法外な高い値段で一旦買わねばならなかった。そして今度はそれをすぐその場でローマの役人が正規の値段で

買い上げするという仕組であった。またすぐ近い所に収めるべきローマの役所があっても、遙かに遠い収納地を指定される。住民は穀物をその遠隔地にわざわざ運ばねばならない。それが出来ない者や、嫌な者は特別の金を供えねばならないというものであった (*Agricola*, XIX)。

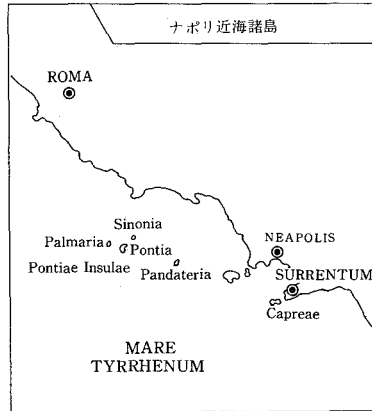
- 34) 神格化については注 11 参看。この神殿はブリタンニアにおけるローマの最初の公共建造物であったが、この叛乱で破壊された。その後ノルマン人がこの基礎の上に城塞を築いた。これが今日コルチェスター博物館 Colchester Town Museum として使われているものである。
- 35) Tacitus, *Annales*, XIV—31。
- 36) Lucius Annaeus Seneca. 生年は不詳であるが、紀元 5 年に死んだ詩人アシニウス・ポリオ Gaius Asinius Pollio (前 76—後 5) についての記憶のあることをセネカは *De tranquillitate animi* の 17 章 7 節で述べていることから、彼の生年が推測されて、前 5 年、前 4 年または前 2 年、前 1 年の諸説がある。没年は 65 年 4 月中旬であった。彼は詩人・劇作家・哲学者・政治家であった。高利貸でも有名である。ヒスパニア Hispania (今日のスペイン) のコルドバ Corduba に生まれ、ほんの幼い頃にローマにいた母の妹の許に預けられた。幼時病弱で、自分の罹らなかつた病気はないとまでいっているが、これは善意にとれば彼の修めた修辞学と雄弁術のなせるところであり、悪くいえば彼の虚妄である。成長するに及んで健康となり、修辞学・哲学・弁論術を学び、ストア派に傾倒してそれを発展させ、靈魂と肉体を分けて前者に優位を与えた。彼は近代のユダヤ人の銀行家・金融業者の風情であった。そうしてその殷勤な態度で上流社会に好んで姿をあらわし、貴族や権力者にとり入り、この世の享樂を楽しむ「哲学者」であった。41 年春クラウディウスが、前皇帝カリグラが 39 年秋に陰謀の嫌で自分(カリグラ)の妹のユリア・リヴィア Julia Livia とアグリッピーナの 2 人を流していた流刑地のポンティア島 Pontia insula (Pontia, Sinonia, Palmaria の 3 島からなるポンティア諸島 Pontiae insulae の主島。最近ではムッソリーニが流された) からローマに呼び戻したが、この 2 人の姉妹は叔父のクラウディウスの宮殿にしばしば出入りし、特にユリアは露骨に皇妃メッサリナ Messalina にはり合った。またこの 2 人はセネカとも親密な間柄であった。41 年が過ぎ去る前の頃(注 42)、メッサリナは皇妃の地位を狙う可能性の最も強いアグリッピーナに警告を与えるかのように突如ユリアをセネカとの不義を口実として告発した。皇妃のいいなりの帝はこのためユリアを流人島のパンダテリア Pandateria (または Pandataria, Pandatera) に流し、間もなく彼女は殺された。この島は今日のヴェントテーネ島 Ventotene でネアポリスの西ティレーヌム海 Mare Tyrrhenum に浮かぶ小島で、こゝはアウグストゥスの娘ユリア、それにこのユリアの娘でネロの祖母のアグリッピーナ(ネロの母と同名のため前者を大アグリッピーナ、後者を小アグリッピーナとよぶことがある)が流され、またクラウディウスとメッサリナの娘でネロの義妹となり、更にその皇妃となったオクタヴィア Octavia の流された島である。一方セネカは荒地のコルシカ島 Corsica に流されこの島で失意の 8 年間で余

儀なくされた。ストア哲学を修めたといわれる彼は、初めはこの流刑に極めて恰好のよい体裁をつくらっていたが、やがて恩赦を得るために皇帝や、とり巻きの有力者、殊にメッサリナに恥も外聞もない卑屈と阿諛の言葉に満ちあふれた全く醜い嘆願の手紙を出したのであった。48年秋メッサリナは不義・陰謀の廉で自殺を余儀なくされ、49年の初めにアグリッピーナがクラウディウスの皇妃となった。コルシカで50歳になったと思われるセネカはアグリッピーナの力でローマに帰ることが出来、ネロの教育係となり、執政官となり、更にネロ政権を握ってこの上ない権力と富とを得たが、晩年皇帝となることを企み、ローマから約6.5km離れた別荘に言葉は悪いが、ノコノコと出てきてその時を待ったが、逆に反逆罪に問われネロにより死を与えられた。彼は死に当っても虚栄を張ったが結局は見苦しい有様を呈して世の笑い草となった。このように彼の一生は数奇であったが、それにもまして不可思議なものは彼のいう哲学とその日常の実生活の違いであった。雄弁家だけに文章や言辞は雄大でも実行が伴わず、富を軽んずることを説きながら秘かに高利貸をして蓄財し、その広大な土地所有はエジプトにまで及び、贅沢を非難しながら脚は象牙、台は家具材として最高価のアフリカ産のシトラス・ウッド Citrus Wood のテーブルを500ヶ、しかも全部揃いで備え、追放の身にあっては破廉恥な嘆願書を矢鱈と綴り、そのストア哲学とは全く裏腹の矛盾は極めて多かった。自らの富については一流の詭弁を弄していた。残念なことながらもセネカの哲学者としての評価は近年特に下がっており、例えば Weigall はセネカの言行は異常と述べ (p.175)、Henderson は哲学者とカストリックな殉教者としてよりもむしろ 'a courtly "Director" of Dames' と評している (p.111)。Russell はその *History of Western Philosophy* でセネカについての記述は僅か半頁にもならず、しかもその哲学については一言も与えず彼の高利貸を辛辣に皮肉っている (p.267)。Dio Cassius は全くのインチキ哲学者と見做している (LXI-10、但し注38参看)。

セネカの金利は非常に高かったことを多くの史家が伝えている。

- 37) 40,000,000 セステルティは Dio Cassius に由来する (LXII-2)。
- 38) Dio Cassius, LXII-2。セネカについての Dio Cassius の記述には特に偏見があるといわれる。
- 39) Gaius Suetonius Paulinus, 生没年不明。彼は初代ブリタンニア知事のアウルス・ブラウティウス (注47) や、後に皇帝となったウェスパシアヌス (注74)、また名将コルプロ Gnaeus Domitius Corbulo (?-67) などと共にクラウディウス帝初期に互いにラ

第9図



イバルであった有能な人物の一人であった。41年から42年にかけてアフリカ北西のマアウレタニア地方 Mauretania (今日のモロッコ Morocco) 平定の指揮官となって軍隊を率い、ローマ人にして初めてアトラス山脈 Atlas mons の横断をなし、その記録を残したと伝えられる (Plinius, V—i—14)。43年ローマに凱旋して *triumphalia ornamenta* (凱旋將軍顕章) を受けたがその後は鳴かず飛ばずであった。59年ブリタンニア知事となってボウディッカの叛乱に直面した。この乱の鎮圧後彼はその統治に非情なまでにきびしい政策をとり、警備は極端に強化され、叛乱の気配ある部族は徹底的に制圧された。カータス・デシアヌスの後任の *procurator* として60年または61年夏頃ラインランドの前任地から赴任してきたクラッシキアヌス Gaius Julius Alpinus Classicianus はこの叛乱の原因調査・報告もその任に兼ねて政府と直通する立場にあった。Merrifield は彼は単なる役人というより政治家の立場であったと述べている (*Roman London*, p.69)。このため彼とスエトニウス知事との間はやがて齟齬するようになった。クラッシキアヌスは知事のきびしい方策では住民が穀物を播く機会も土地も失い、税源が枯渇する恐れがあるとし、またそれよりも更に知事に対する私恨からネロに悪意ある信書を幾度も送った。それは「スエトニウスが代らぬ限り戦争の終結は望み得ない」 *Simul in urbem mandabat, nullum proeliorum finem exspectarent, nisi succederetur Suetonio*. (Tacitus, *Annales*, XIV—38) という有名なものであった。このためネロは解放奴隷のポリクリトゥス Polyclitus を実情調査に遣った。重要な国政に解放奴隷を採用したのはアウグストゥスであり、クラウディウスはこの方策を更に stretched。その名をきいては泣く子も黙るとまでいわれたポリクリトゥスはおびたがしい随行員を伴ってブリタンニアにやってきた。彼の報告はスエトニウスにやや好意的であって、彼は知事の地位に留まった。しかし彼は間もなく軍船2,3隻を失ったという失策が因でローマに召喚された。ポリクリトゥスの調査後直ちに彼を召喚することは彼を奉ずる軍隊の暴動につらなる恐れがあるので時機をみていたともいわれる。ネロの死後の皇帝乱立の内乱ではオトに組みしたが、やがて彼を裏切って次の皇帝となったウィテリウス Aulus Vitellius (15—69, 69年4月オトを自殺に追いやって皇帝となったが同年12月20日帝位を追われ虐殺された。皇帝はウェスパシアヌスに代った。) について。

- 40) この年代もプラスチックスの没年及びボウディッカの叛乱の年と互に関聯し合って60年または61年といわれる。
- 41) 今日のアングルスィ Anglesey (または Anglesea)。
- 42) Tacitus たちは判っきりした時を示さずにこのような表現を好む。注78から推して6月初旬と思われる。
- 43) 今日のチェスター Chester。この当時この地はまだローマ軍の駐屯地になっていなかった。駐屯地となって第20軍団(注46)が配置されたのは84年以降である。
- 44) 軍団には綽名のついたものが多い。この第14軍団はゲミナの名をもち Legio XIV Gemina といわれる。43年クラウディウスのブリタンニア遠征に高地ドイツ方面配属

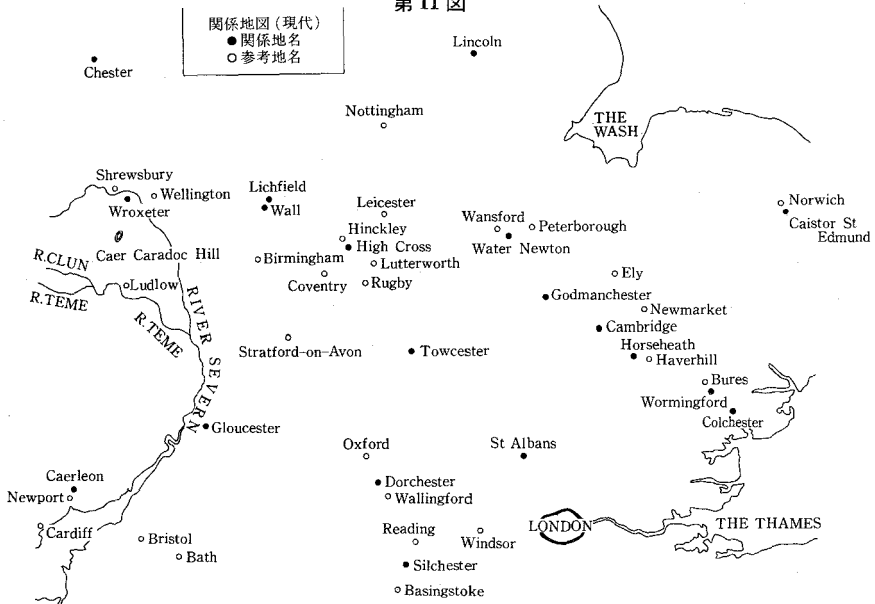
のうちのマインツ Mainz (当時 Moguntiacum) から進駐した。当時はロンディニウムからドゥロベルヌム Durovernum (今日のカンタベリ Canterbury) に至る道路、すなわちワエクリング・ストレイイト (注 76) の建設に当たった。この軍団はこの乱の鎮圧に大きな功績をたてたことによりマルティア・ヴィクトリクス Martia Victrix (= The Martial, the Victorious) の名を得て、以来 Legio XIV Gemina Martia Victrix となった。

- 45) アウグストゥスによってイタリア以外の駐屯地の軍団に設けられたもので、現地志願兵から成る。正規軍より給料はもとより、武器も悪く、なかには自分たち生国の武器をもつことも多かった。
- 46) 第 20 ヴァレリア・ヴィクトリクス軍団 Legio XX Valeria Victrix. クラウディウスのブリタンニア遠征に低地ドイツ方面配属のうちのケルンから進駐し、第 14 軍団と同じくワエクリング・ストレイイトの建設に従事した。この軍団のバッヂは猪であった。
- 47) Caractacus とも綴られるが史家はこれを採らない (Henderson, p.477)。ケルト語では Caradoc, ウェイルズ語で Caradawg と記される。クノベリヌスの息子のうち今日その名が伝へられるのは 3 人いるが、アミニウス Amminius は他の 2 人の兄弟、す

第 10 図



第 11 図



なわちこのカラタクスとトゴドゥムヌス Togodumnus から追放されて40年ガッリアに逃げカリグラに臣従した。この2人は反ローマの急先鋒で根強い抵抗を続けた。先ず43年クラウディウスの遠征軍をカンティウム Cantium (今日のケント州 Kent) で迎撃し、メドウェイ河 Medway の手前で古代の戦争としては珍しい2日にわたる長い戦いでローマ軍を苦境に追い込んだが、トゴドゥムヌスの戦死もあってタメシス河の線に退却せざるを得なかった。ローマ遠征軍の総指揮官で初代ブリタンニアの知事となったパンノニア Pannonia 出身の將軍アウルス・ブラウティウス Aulus Plautius は、で帝の率いる援軍を待った。一方カラタクスは日が経つにつれ自軍の兵士の士気が失われてゆくのに気がつき抗戦を一時あきらめた。このため皇帝は何の抵抗も受けずカムロドゥヌムに無血入城した。カラタクスはその後今日のコーンウォール Cornwall, デヴォンシャー Devonshire, 及びサマセットシャー Somersetshire の一部からなるドムノニ半島一帯を占めていたドムノニ族 Dumnonii (または Damnonii, Damnii) に逃げたが予期した協力も共感も得られなかったのでウェイルズに退き、ここのシルレス族やオルドビクス族 Ordovices と組んでブラウティウス及び二代知事のオストリウス・スカブラに徹底的な抵抗を試みたが、遂に50年ウェイルズ国境シュロプシャー Shropshire のクランClunとティームTeme 両川^{*1}の合流点の平野での戦いに敗れ、砦のカーエル・カラドック Caer Caradoc といわれる約450mの小高い丘に今日伝えられるカラタクスの洞窟 Caratacus's Cave^{*2}を残してブリガンテス族の女王カルティマンドウアのもとに逃げた。彼女はクライアント・クィーンではあったがその部族は極めて好戦的で、しかもかつて彼女のコンソートのヴェヌティウスは彼女のその身分をよこばず、乱を起すなど根本的にも歴史的にもローマに反抗的であった。カラタクスはそれを利用して彼女にクライアントの身分を捨てさせ自分と共に抗戦することを説得しようとしたのであった。しかし彼女はローマに臣従していたので51年彼を縛ってローマに引渡した。彼は彼女のもとに着くと直ぐ縛られたとも、また暫くした後奸計にかかって縛られたともいわれる (Lindsay, p.68)。

実に9年間にもわたる執拗な抗戦も遂に終り、彼は先きにカーエル・カラドックで捕えられていた家族・兄弟と共に捕虜としてローマでの戦勝記念行列の見世物とされたが、この時彼は捕虜の身とは思えぬ堂々たる演説を行って威厳を保った。これによりクラウディウス帝はその身に自由を与えた (Tacitus, *Annales*, XII-37)。

*1 この辺りは A.E.Housman が陽の下でこの辺り程静かなところなしと歌った (*A Shropshire Lad*, L.) 場所であるが、詩人の歌った当時よりも今日の方が更に静寂としているといわれる。

*2 これは *Holinshed's Chronicles* (IV-6) と Rapin (vol. I, p.14) が伝える。

48) Tacitus, *Annales*, XIV-29.

49) Druids. ローマとの因縁は古く、しかも深く、Caesar, キケロ Marcus Tullius Cicero (前106.1.3-前43.12.7.ローマの有名な政治家・学者・作家・弁護士), Tacitus, Plinius, Suetonius などの著作に記録されている。この名は古ケルト語 druid に由り、元来

'dru-wid' すなわち 'daru-, dru-' = oak + 'wid' = know で「カシの木を知る人たち」の意である。彼等ドルイド教徒は寄生樹とそれが生えているカシの樹を最も神聖なものと崇めた。彼等は元々ガッリアのケルト族の教団であって、Caesar は次のように記録している。「ガッリアの住民は皆宗儀に深く心を捧げ、そのために重病人や戦争の危険に身をさらす者は、生きた人間を犠牲とするか、またはそうすることを誓い、その式のためにドルイドの司祭を使う。人間の生命のためには人間の生命を捧げなければ不滅の神々をなだめることは出来ないと思われ、それで公私共に同じように生贄の儀式を行い、また他には細枝で編んだ手足の大きな人形を作ってその中に生きた人間をつめて火をつけ、焔で焼き殺すのである。彼等は盗み・強奪その他の罪で捕えられた人間を死刑にすることがこの上もなく不滅の神々の喜ぶところと思われているが、もしそのような罪人のいない時には罪のない人間までを生贄に供する」(*De Bello Gallico*, VI-16)。Frazer 卿は「ケルト族は5年目毎に行われる大祭に神々に供える生贄となるべく宣告された罪人をあらかじめ決めておいた。…もし生贄となる罪人が足りない時には戦争での捕虜が生贄となった。祭りの時期がくると生贄はドルイド、すなわち司祭によって犠牲とされた。ある者は矢で射殺され、ある者は串刺とされた。またある者は生きたまゝ、次のようにして焼かれた。木の枝で編まれた、または木と草とで編まれた大きな人形が先ず作られ、その中に生きたまゝの人間・家畜それに他の動物が詰め込まれ、それからその人形に火がつけられる。そうしてそれらは一緒に焼きつくさるのであった」(p.653 f.)。そうしてこの教団は毎年「一年間のある時期にカルヌーテス族の領地に集り、その神聖な場所で密儀を行う」(*Caesar, Ibid*, VI-13)。今日、パリから西南に鉄道で約88 km、急行で約1時間のシャルトル Chartres の町に美しい大聖堂がある。この聖堂の西寄りのクリプトに深さ33 mに達する古い井戸があるが、これが多分カルヌーテス族 Carnutes の崇めた神聖な泉で、こゝで彼等は祭儀を行ったのだらうと思われる。そうでもなければあの何も無い広いボース Beauce の大平野の中にただ大聖堂だけが聳え建っている謂れを見出し難いのである。また Caesar が記するようにガッリアのドルイドの司祭たちが教義の蘊奥を極めたいと思う時には修業のためにブリタンニアに行く (*Ibid*, VI-13)。そこがモナ島であった。更に Caesar も記しているが、ドルイドの司祭になるためには20年近い見習期間を要し、司祭として公私にわたって神聖な祭儀を司るばかりでなく、彼等は裁判官であり、口承伝説の伝達者であり、占星術者であり、それらを教える教育者でもあり、更にまた巧みに物をいう知的性質をも訓育する教育者でもあった。彼等は死を知らず、死を恐れぬあのケルト族の勇敢な気質の訓育にも当り、ケルト族の中で最も尊敬された階級であった。彼等はカエサルの頃既にローマ抗戦の陰の立役者であり、21年のプロウルスの叛乱の時もまたそうであった(注104)。アウグストゥスはドルイドの祭儀を禁じ、ティベリウスはガッリアからドルイド教団の追放に力を注ぎ、クラウディウスも属州からの絶滅を期した。それにも拘らず彼等は衰えることがなく(Tacitus, *Historiae*, IV-54)、就中ブリタンニアにおける彼等の力はガッリアよりも強く、カラタクスのローマ抗戦を支援し、ローマの統

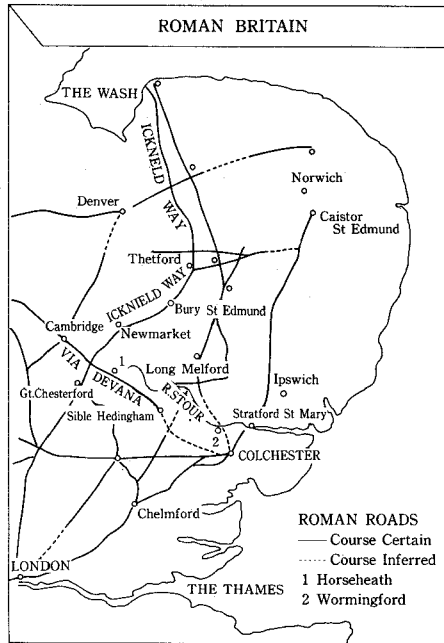
- 治地域の内外を問わずその力は深く滲透し、反ローマ分子の間に強力に結合していた。
- 50) 知事スエトニウスのモナ島攻撃がボウディッカ叛乱の原因ともなっていることを Tacitus たちラテン史家は記述していないが、現代史家はこれに着目し、それが叛乱の一つの大きな原因であるとみている。Dudley, A. Birley などに詳しい。
- 51) 注 2 及び 7 参看。
- 52) このように諸部族が結集して戦うことはブリタンニアの部族としては珍らしい。Tacitus は「かつて彼等は幾人かの王の支配するところであったが、今は相争う族長に率いられた幾つかの部族に分れて孤立している。事実今迄われわれがブリタンニアの強力な部族を相手に戦う時に彼等が一致団結して事に当るといことがなかったこと程われわれに有利なことではない。2つか3つの部族が共通の危機に対処するため共同体制をとるといことはまことに稀である。このようにして彼等は単独で戦っては、ひとまとめになって征服されるのである」(Agricola, XII) と述べ、また Gibbon もこれを敷衍してか「ブリタンニアの諸部族は勇敢であったが統率に欠け、自由への熱望は強かったが団結の精神に欠けていた。彼等は猛り狂うばかりの勇気でもって武器をとりながらも不統一のためにそれを捨て、あるいは互いに相戦うのであった。こうして彼等は各部族が単独で戦っているうちに次々と征服された。カラクタクスの堅忍不拔の抵抗も、ボウディシアの死を睹した悲願も、ドルイド教徒の熱狂もすべて彼等の国の屈従せる運命を変えることが出来なかった」(p.6) と述べている。尚こゝでボウディシア、カラクタクスと表記したことについては注 1 を参看されたし。
- 53) 叛乱の年を 61 年とするのは Tacitus (Annals, XIV-29) を奉ずる学派であり、60 年とするのは Julius Asbach の研究 (p.8) を奉ずる派である。
- 54) Tacitus の記述は次のようになっている。「氣違ひじみた妄想にとりつかれた女たちが(ローマの)破滅は近いと喜び叫んで」*Et feminae in furorem turbatae adesse exitium canebant.* (Annals, XIV-32)。
- 55) カムロドゥヌムを指す。
- 56) ロンディニウムの町をいう。
- 57) Dio Cassius, LXII-2. Welch は 70,000 としている (p.103)。しかしこの数字を彼が何を基準として割り出したかを説明していない。
- 58) Dio Cassius, LXII-2。
- 59) Dio Cassius はボウディッカが他の女性より知力にすぐれ、と述べているが、この演説の中にはこのようにブリタンニア人がローマ人よりも暑さ寒さに対する抵抗力があるとか、ローマ人は舟でも容易でない川を自分たちは裸で泳いで渡れるとか、奇異な比較がある。非常時の異常な精神状態の群衆を扇動するには効果的であるかも知れないが、これを読む時にわれわれはシェイクスピアの *Julius Caesar* 劇の中 (I. ii.) でキャシアスがシーザーに対する憎悪から、自分はシーザーよりも泳ぎが巧みであるとか、寒さにも強い。あの泳ぎも下手で、寒さに弱く震え上るような奴をどうして皇帝などに出来るかと言っている言葉を思い出すものである。勝ち目のない方が往々このような

言い草をすることを歴史は教える。

- 60) Dio Cassius, LXII - 3, 4, 5.
 61) Cottrell はその数を 200 名と明記している (*Seeing Roman Britain*, p.167).
 62) 今日のロンドン London。注 71 参看。
 63) 今日のフランス全土及びイタリヤ, スペイン, ドイツの各一部などヨーロッパ大陸の大半を含む広大な地域を称した。通常ガリアまたはゴールと表記される。
 64) 第 9 ヒスパナ軍団 Legio IX Hispana。クラウディウスの遠征にパンノニアから進駐し, 当時アーミン・ストリート (注 66) の建設に従事した。
 65) Quintus Petillius Cerialis Caesius Rufus。ウェスパシアヌスの縁者で, この叛乱後ライン地方で功績をたてた。71 年から 74 年までブリタンニア知事であった。彼が先ず着手したのはブリガンテス族の討伐であった。彼は恐怖の念を起させる程の徹底した討伐を行い, その征服は完遂した。74 年ローマに帰還し, 二度目の執政官となったがそれ以後については不明。
 66) Irmine Street とも記される。サクソン人のつけた名で, 彼等の集団名がその由来とされる。ローマン・ブリトン当時のこの道路に与えられていた名は伝わらない。道路は先ずロンディニウムからリンドムまで敷かれ, 次いでエブラカムまで延長された。またこの名はカレワ・アトレバトゥム Calleva Atrebatum (今日のシルチェスター Silchester) からコリニウム・ドブノールム及びグレヴム Glevum (今日のグロスター Gloucester) に至る道路にも与えられている。

- 67) 当時の名は不明。
 68) これは Dudley の説である (p.62)。Merivale は今日のウォーミングフォード Warmingford をあげている (vol. VI, p. 255, n.)。コルチェスターの北約 10 km の地点で, ストウア川 Stour に近い。当時こゝへのローマン・ロードは確認されておらず, また多数の両軍の数から推してこの地点は認め難い。Henderson がこの説をととも放置しておくわけにいかない (I fear this is too uncertain to escape outside the obscurity of a note. p.478) といっていることを妥当とすべきであらう。(しかし Henderson はこう一行述べただけであと

第 12 図



は何もいっていないのである)。尚 Stour の名の川は英国にいくつかあってその地域によって発音は変わる。

- 69) ケリアリスはボウディッカの待伏せにかかったともいわれる (Dudley, p.62)。
 70) Welch はその数を数千人と記している (p.102)。
 71) Tacitus, *Annales*, XIV—33. Tacitus のこの記録はロンドンについて歴史上最初の記録として注目され、有名なものである。
 72) J. Jackson は目的地をカムロドゥヌムとする (LCL, *The Annals*, p.160 f.)。
 73) Tacitus, *Annales*, XIV—33。
 74) 第2アウグスタ軍団 Legio II Augusta。軍団バッヂは山羊と魚を組合せた奇妙なものだが、これはアウグストゥスの紀元前43年アルプス、前36年シチリア島沖の海戦と前31年最も有名なアクティム海戦 (SJC) のそれぞれの勝利を記念してのものであった。この軍団はクラウディウスの遠征に高地ドイツ方面配属のストラスブルグ Strasbourg (当時 Argentoratum) から進駐し、当時の指揮官は後に皇帝となったウェスパシアヌスであった。彼はこの軍団を率いて主としてタメシス河から南一帯及びヴィクティス Victis (今のワイト島 Isle of Wight) の征服を成し遂げたが、この間の戦いは30回を数える程で、彼はしばしば命を落す程の危険な戦いがあったといわれる。その後この軍団はカレウァ・アトレバトゥム經由西北にグレヴムから南部ウェイルズに、また同じくカレウァ・アトレバトゥム經由西南にドゥルノウァリア Durnovaria (今日のドーチェスター Dorchester) からイスカ・ドゥムノニオールムに通ずる道路の建設に従事した。ウェシバシアヌス Titus Flavius Vespasianus (9.11.18—79.6.23, r.70—79) はネロ死後の皇帝乱立の内乱の最終勝利者となって皇帝となったが、ネロの治世中はネロが舞台で歌う、いわゆる「ネロニア」 *Neronia* —— Dio Cassius にいわせると子供の遊び (LXII—1) —— の最中に眠り込んでネロの演技に喝采をしなかったので反逆人と見做され中央政界から退けられていた武人であった。彼の息子2人と共に3代にわたって皇帝を占めフラウィウス Flavius 王朝を樹立した。5万人を収容したといわれる有名な大円形劇場コロッセウムはこの父子3代によって作られたものである。

叛乱当時この軍隊の駐屯地をグレヴムとする説の中に Henderson だけはイスカ・シルルム Isca Silurum (今日のカーリアン Caerleon) を指している (p. 211)。また Dudley はグレヴムを推測にとどめ断言を避けている (p. 63f)。

- 75) Tacitus をはじめとしてラテン史家はこれら軍団の駐屯地、戦場、事件の日時を記録していないという欠点がある。さて途中の合流点は当時第14軍団と第20軍団の駐屯地のヴィロコニウム Viroconium (今日のロクスター Wroxeter) といわれるが、Dudley は別にその可能性のある地点として次の3地点をあげる (p. 63)。 1) リッチ

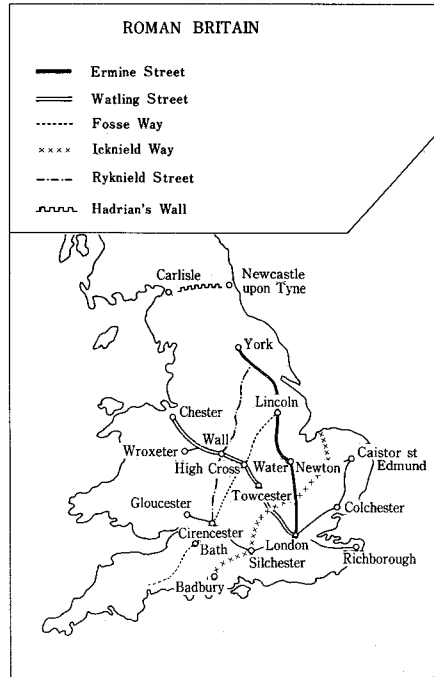
第13図

第2軍団バッヂ



フィールド Lichfield の約 5 km 南, 'grey wood' の意のレトケテム Letocetum である。しばしば Etocetum ともいわれ, ここは今日のウォール Wall という町であるが, 当時ワエクリング・ストレイト (次注) とリクニールド・ストリート Ryckniel Street (Ryknild, Ickniel とも記される) の交差する重要な地点であった。ここにはローマ軍の砦が少なくとも 3 つあった跡がある。注 93 参看。 2) フォス・ウエイとワエクリング・ストレイトとが交差し, ロンディニウムから約 40 km のヴェノナエ Venonae (今日のハイ・クロス High Cross)。 3) ラクトオドルム Lactodorum (今日のトオウスター Towcester)。ここにはグレヴムからの直通路路がなく, またローマ軍の砦もなかったが, ロンディニウムに最も近い地点であることから推してその可能性を否定出来ないとしている。

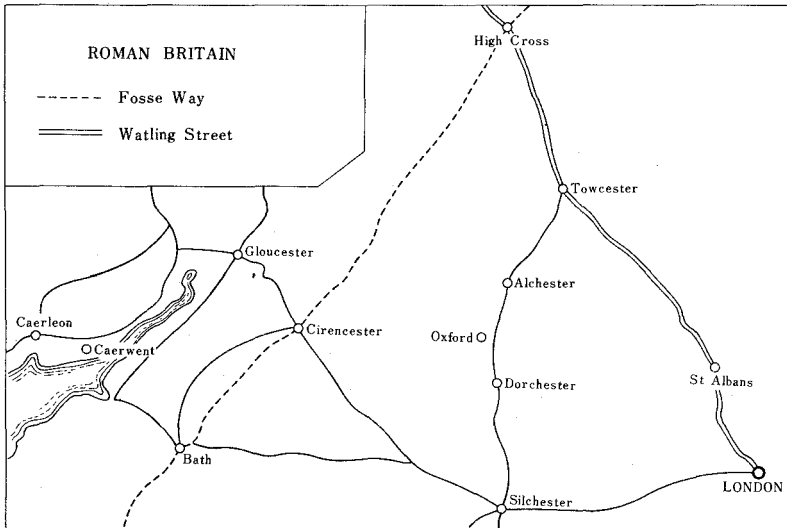
第 14 図



- 76) Waetlinga Straet とも綴られる。名の由来は不明だが個人名からか, との推測もある。今日ワトリング・ストリート Watling Street といわれる。ロンディニウムからヴェルラミウムを通り, ヴイロコニウムに至る有名なローマン・ロード。尚ロンディニウムからドゥロベルヌムを通り, ドゥプリス Dvbris (今日のドーヴァ Dover) に至る道路にもこの名が与えられ, その他今日残っている短いローマン・ロードの幾つかにこの名称が与えられている。
- 77) 77 年説よりは信憑性がある。
- 78) 6 月 13 日といわれる。彼はこの時 *tribunus militum*¹⁾ という地位にあった。これは 1,000 人の兵に対し 1 人の割合で配置され, 通常 1 軍団に 6 名いて, 1 人が 2 ヶ月間ずつ指揮に当るものであった。
- 79) Dudley はスエトニウスの一行はロンディニウムへの最短距離の道をとらず, ワエクリング・ストレイトのどこかの地点から一旦南に下ってカレウア・アトレバトウムに出て, ここから再び北に向いオックスフォードの傍を抜け, 今日のドーチェスター Dorchester on Thames からラクトオドルムに出たと述べている (P 68)。このようにいわれることから推してスエトニウスの一行は非常に少数であったと思われる。

- 80) 事実, Tacitusはこの通りのことを述べているが, その地点はいつもの如く不明である (*Annales*, XIV-33; *Agricola*, XVI)。
- 81) Tacitusは *Annales*, XIV-37でこの将校をただ *praefectus castrorum* と記するだけでそれ以上の説明をしていないため, 司令官が一時の不在であったのか, それとも欠員であったのかが判明しない。尚, この将校はこの叛乱がローマの勝利に終わったことを知った時に自殺した。
- 82) 出版は古いが, 最近出版されているこの種の刊行物より詳細な Harben の辞書を見るとロンドン市内には All Hallows の名のつく教会が 10 ある (ただしこの中に極く最近取壊わされたのがある)。Bread Street の All Hallows, Lombard Street の All Hallows, London Wall の All Hallows, そして All Hallows Colemchurch, Fenchurch の All Hallows, All Hallows the Great, All Hallows the Less, All Hallows Staining, Honey Lane の All Hallows それにこの All Hallows である。この教会はその地区の名がついて All Hallows Barking ともいわれ, またロンドン塔に近い All Hallows by the Tower とも All Hallows Barking by the Tower とも称される。この教会はロンドン市内で最も有名なものの一つで LCC の出した *Survey of London* という巻数・サイズ共に膨大な出版物のうちの 4 巻を占めている。この教会が何時・誰によって建てられたかは不明とはするが, 675 年頃の建造と伝えられて筆者が訪れた本年 1975 年は丁度その 1300 年記念祭が行なわれていた。
- 83) ウォルブルグ川溝は現在は密集した建物の下に僅かにパイプとなってテムズ河に放出口を持っているだけであるが, その名は通りの名となって残っている。また昔の川の

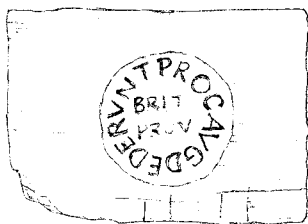
第 15 図



流れの位置が確認されている部分が見られる。この川溝はカムロドゥヌム方面に通じていたのでこの岸辺から1～2世紀のローマ人が使った靴・竿秤などの日用品が発見されている。

- 84) 現在のロンドンの地表は当時より可成り高くなっている。
- 85) 第3図のように、今日のロンドン・ウォール通 London Wall から南へテムズ河畔までの一帯がローマ官庁の所在地であったことが考証されている。またそれを示す次のようなものがこの辺りから発見されている。
- (1) PROC AVG DEDERVNT BRIT PROV (第16図)
- (2) P・PR・BR, P・PR・LON, PR・BR・LON, P・P・BR・LON, P・P・BR・LON (第17図, 第18図)
- (1) 1934年ウォルブルクから発見された。「ローマ帝国属州ブリタンニア駐在財務局発行」とローマ官庁の焼印の押された木片で約14.5cm×9.5cm(厚さは薄い部分が0.3cm, 厚い部分が0.5cm)の大きさのもので現在大英博物館にある。

第16図



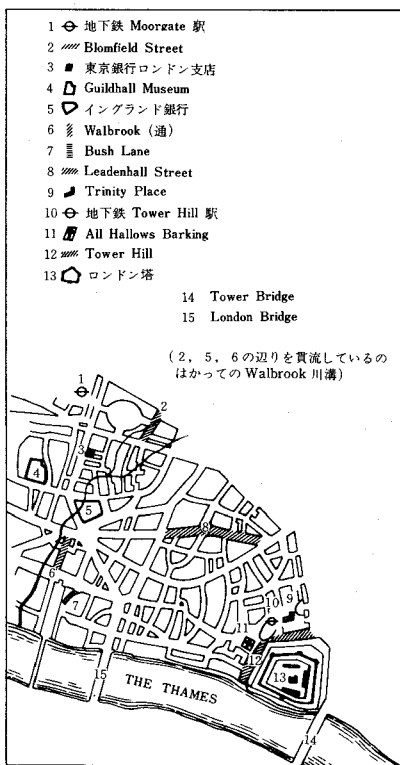
第17図



第18図



第19図



(2)はいずれもローマ宮庁の屋根瓦と推定される。発掘された年代はいずれも 1841 年頃である。大英博物館の Romano-British Antiquities 当局の説明では博物館が下記の 1 つをスミス(注 104)のコレクションから得たのが 1856 年ということである。最後の P・P・BR・LON を除いて他はロンドンのアッシュ・レーン Bush Lane, プルムフィールド・ストリート Blomfield Street で発掘され、今日ギルドホール博物館に蔵されているというが現在(1975 年)その新築工事で閉館している。最初の P・PR・BR は第 18 図の如く罫枠がつき、この形のもは枠のないものより初期のものといわれる(Lethaby, P-189)。最後のものはレデンホール・ストリート Leadenhall Street から発見され、大英博物館に 1 ケあり、ロンドン博物館(ケンジントン・パレス Kensington Palace 内)に 1 ケある。共に同じ位の大きさの破片で、しかも最後の 'N' のところで割れている。文字の部分の大きさは約 9 cm×1.5 cm である。大英博物館がこれにつけた説明は次の通りである。Tile stamped P・P・BR・LON ('Publicani (tax-gatherers) of London in the province of Britain')。一方ロンドン博物館は次の説明である。Fragmentary roof-tile stamped : P P BR LON a reference to some government department 'of the Province of Britain at London'. Stamps like these are one of the pieces of evidence that London became the financial and probably the political capital of Roman Britain.

この両博物館の説明には違いがある。確かにこの文字の解釈は問題とされ、今日まで諸説のままで結論が出ていない。今ここにその諸説をまとめてみる。

P. P. BR・LON---

A: BRについては *Britanniae*= of Britain とされる。

B: LON---は石が割れているが *Londinii*= at London と解される。

C: 2つの P・Pについては先ず同じ文字を並記するのはその語がしばしば複数を示すという説。次にこの Pは何の語のイニシャルかという問題があって、それらが組合されて次の3つの解釈が行われている。

C1: *Procuratores*= procurators

C2: *Portitores*= harbour officials, customs officers

C3: *Publicani*= tax-collectors

このうち C1 を支持するのが多い。

D: 2つの P・Pのうちの最初の Pは上記 C1, C2, C3のそれぞれの単数であるとする説。これを D1, D2, D3とする。

E: 残りの Pは *Provinciae*= of the province とする。

このような大方の説を総合判断すると次の組合せとなる。

D1+E+A+B

ロンドン博物館の説明は Merrifield の説を中心にして P・Pの解釈の明示をさけている。しかしわれわれがみた大英博物館の説明は明らかに Hübner の説を採用している。

彼は問題の最初の Pをすべて *Publicani* に解釈し、LON を形容詞の主格にとってこ

れを *Publicani* に一致させている。彼の説明は次の通りである (p. 227)。

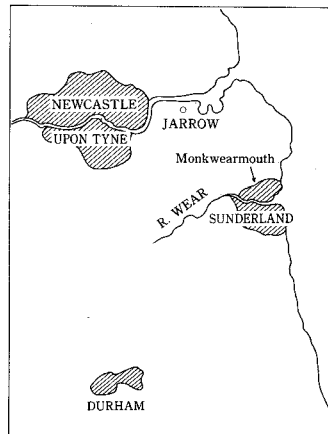
- a. P · P · BR · LON = *p(ublicani) p(rovinciae) Bri(tanniae) Lon(dinienses)*
 b. P · P · BR · LON = " " *Br(itanniae) "*
 c. P · PR · LON = " " ^(*) *Lon(dinienses)*

(*) のところは当然 *pr(ovinciae)* と書くべきを Hübner は「"」としてしまった。

- 86) Tacitus, *Annales*, XIV-33 ; Dio Cassius, LXII-7.
- 87) 地名ではなく、場所は勿論不明である。アンドラステ *Andraste* というのは叛乱軍の勝利の女神のことである。注 89 参看。
- 88) *Paradise Lost* の著者ミルトン John Milton は歴史家でもあったが、この惨状を更に詳述している。彼によるとローマ人の女は妻も娘も全員が全裸でつるされ、そしてその 'in the grimness of death' の状態で切られた乳房を口にくわえさせられた (p. 47) とされるが、詩人の筆はすべり過ぎた嫌いがある。
- 89) Dio Cassius が LXII-7 で記録したものであるが、後世の史家がこの *Andraste* について説明することがなく、ただこれを *Andarta* または *Andate* と云い換えるだけである。僅かに Elton が説明している。これについての最も詳細な研究はエジンバラ大学の Scottish Studies の Anne Ross 博士のものである。*Andraste* は南東ガッリアのヴォコンケス *Voconces* の女神 *アンダルト* *Andarta* と近縁にあるらしい。その祭儀が何処で行われたかは不明であるが、ケルトの女神を祭るもので、その名は地方によって少しずつ変って「すぐれた者」、「女王」、「偉大なる女王」、「不滅なるもの」、「要塞の女王」などとなりながら広い地域にわたってその祭儀が行われていたようである。アイルランドにもそれらしきものが見受けられた。ただ *Andraste* の名はケルト族だけのものであって「征服されざる者」、「無敵の者」の意を表わしている。博士は Dio Cassius が描写したところの、切った乳房を口にくわえさせるというのは彼の想像の所産であろうと述べているが、生きた人間を木の中に入れてつるし、神々に捧げる生贄のやり方は確かにケルト族のものだと述べている。しかしわれわれはこのことは博士の言葉を待つ迄もなく既に注 49 で知るところである。ケルト族は戦争の終わった時、生きた捕虜の頭を生贄に捧げて勝利の女神に感謝の祭儀を行ったともいわれる。

- 90) Tacitus は 3 つの町の名を *Annales* で記録した。Dio Cassius は名をあげないで 2 つとだけ記録している (LXII-1 及び LXII-7)。Suetonius は 2 つの「重要な町」が、と記するだけで名もあげず、また犠牲者も多数とするだけである (*Nero*, XXXIX-1)。Bede は Suetonius をうけて「2 つの最も有名な町が襲われ破壊された」

第 20 図



(*Historia* I-3)と記するだけで名も数もあげていない。BedeはBaeda, Bedaともいわれるが通常「尊者」Venerableの敬称を冠する。生年は672年または673年で、没年は735年5月25日または27日である。ノーサンブリアNorthumbria(今日のノーサンバーランドNorthumberland)のモンクトンMonkton(今日のモンクウィアマスMonkwearmouth.サンダーランドSunderland市内)に生まれ、7歳でウィアマスWearmouthの修道院に入ったが682年ジャロウJarrowの修道院に移り終生この地で研究・著作・教育にその一生を捧げた。*Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum*(731年完成)などを著わし当時ヨーロッパ随一の学者との名声を得、また英国史の父といわれる。しかしこの叛乱についての記述は*Historia*の中で上記の1行だけである。

- 91) Dio Cassius, LXII-1。彼は万事に多い数字を記録する。
- 92) Tacitus, *Annales*, XIV-33。Jacksonはこの数を信じていない(LCL, *The Annals*, p. 162)。W. Churchillはこの数を認め、しかもこのような殺戮は住む土地を守るための人間の尊い権利だと述べている(p. 21)。
- 93) バーミンガムの北約27kmの地点がリッチフィールドで、その約5km南にレトケトムがある。注75に述べた通りここは当時重要な地点であった。ロンディニウムから約121ローマ・マイル(約176km)あるからスエトニウスは一度駆けつけたロンディニウムから随分後退したことになる。尚、リッチフィールドはジョンソン博士の生地である(SMB)。
- 94) 最も強硬な反抗的部族シルレス族に対処するための軍団の一部は駐屯地に残留させておかねばならなかった。
- 95) Hendersonは第14軍団が5,000名全員と第20軍団が2,000名、それに補助隊を3,000名としているが、DomaszewskiやHübnerは第14軍団を6,000名と計算している(Henderson, p. 505)。
- 96) Tacitus, *Annales*, XIV-34。
- 97) Dio Cassiusは実に230,000という数を記録している(LXII-8)。これは彼の得意の表現であり、特にここではローマ軍の勝利を一段と輝かしいものに思わせるための誇張としか考えられない。
- 98) Tacitus, *Germania*, VII及びVIII。彼等は妻子、食料及び食料としての生きた家畜をのせた荷車や馬車を軍隊と共に率いていた。妻子は戦う夫を後方から激励し、かつ敵の虐殺される有様をみて歓喜し、一方夫は己れの戦ふりを妻子に賞されるのを喜んだ。またこの荷馬車は負傷者の手当や武器の修理及び万一退却の際の防壁とするためのものであった。

尚、ここに両軍にとって戦闘以上に大きな問題があった。それはこのような大軍への食糧供給の問題であった。それ故にも戦いは早く決められねばならなかった(Tacitus, *Annales*, XIV-34; Dio Cassius, LXII-8)。

- 99) Tacitusは*Agricola*のXVIでもこれと同じことを記しているが、このような女の指導

者、しかも戦斗の指導者のいたことを記録する文献は他に見当たらない。ただ Holinshed も古代ブリタンニアでは政治の指導者に男女の区別はなかったと記している (IV-10)。

- 100) Tacitus *Annales*, XIV-35.
- 101) *Ibid*, XIV-36.
- 102) *Ibid*, XIV-37。しかしこれも Jackson は両軍の死傷者の数は信憑性がないと注釈している (LCL, *The Annals*, p. 168)。Chambers は全く意味がないと説明している (p. 34)。
- 103) Tacitus は毒を飲んでと記すだけで、それが戦場でなのか、または別の場所でののか不明である (*Annales*, XIV-37)。しかし Dio Cassius は病死したと記録している (LXII-12)。これも何処でだかは不明である。Holinshed が、女王を病死としたのは Dio Cassius だけだと特に (不満気に) 書いたのは (IV-13)、英雄の死に病死はふさわしくないとする気持からであろう。多くは Tacitus に従って曖昧な表現をしているが、Harbottle はその場所を戦場としている (p. 52)。
- 104) 注 39 参看。尚、クラッキアヌスの墓と思われるものの飾りの部分と碑文の刻まれた部分とが 1852 年 ロンドン塔のタワー・ヒル Tower Hill の北トリニティ・プレイス Trinity Place で発見された。その碑には DIS (.) ANIBVS (...JAB · ALPINI · CLASSICIANI と美しい文字が刻まれていた。19 世紀のすぐれた古代研究家の Charles Roach Smith はこれを 'クラッキアヌス' の墓と解釈した。ワイト島の農家の子で 10 人兄弟の末子に生まれた Smith (1807. 8. 20-1890. 8. 2) は幼時に父を失い、少年時代に母にも死なれて十分な教育は受けず職も転々としたが、早くに抱いた古代遺跡への情熱はその生涯独身の長い歳月に消えることなく、多くの研究・著書によって名声は国際的であった。Smith は 1859 年に発表した *Illustrations of Roman London* の中でこの碑の解釈を次のように行った (p. 28)。彼は先ずこの碑文を *Diis [M]anibus... [F]ab [ii] Alpini Classiciani* とよみ、この碑は身分の高い人のものであると明言し、しかも発見された部分は全体の $\frac{1}{4}$ 以下の大きさのものであることまで見抜いた。彼は *Fabii Alpini Classiciani* は属格でこの *Fabii* の語の前にこの碑が建てられた人 (*Classicianus*) の父の名がある筈だと説明し、ファビウス族 *Fabius* の子にしてネロ皇帝時代のブリタンニアの *procurator* であった *Julius Classicianus* その人の墓であると述べた。しかしオックスフォードの史学と古代遺跡についての権威とされる Collingwood—筆者は彼の著書 *Roman Britain and the English Settlements* の中に以前から承服し兼ねるところがある—は今は亡き Smith の説を、しかもその発表から半世紀以上経った 1927 年になって批判した。彼は Smith の説のうち、この碑が墓であることの以外はすべて否定し、彼はこの *Fabius* を *nomen* と解釈し、*Classicianus* の語を「かつて海軍にいた」ととり、Smith の説を解釈すれば *Fabius* の前に死んだ人間の名 (*nomen* のことをいう) がくることになるが、これは不可能であって、しかも *Classicianus* なる名を Tacitus の *Annales* に記録された人物と結びつけたのは明らかに間違いだと批判し、ラテン語の解釈が間違っているなどと注をつけてまで痛烈に非

難した (*Royal Commission on Historical Monuments (England)*, p. 171)。

Collingwoodの説くように Fabius を *nomen* とすれば *Classicianus* は当然 *agnomen* となる。Smith の説では *Classicianus* は *cognomen* となる。Smith 自身もその説明の中でこの名は稀な名前だと述べている。結局ここに Smith と Collingwood の力の差があった。元来 *agnomen* は英雄的人物、例えば Publius Cornelius Scipio のような人物に Africanus の *agnomen* をつけて Publius Cornelius Scipio Africanus とする個人的用法の他に、Cato とか Cicero のような有名な家系につける家族名であった。Collingwood はこの Fabius Alpinus なる人物をどこかの艦隊の名提督とでも考えたのか、この点を彼は一言も説明していない。筆者の知る僅かな知識では 280 年頃既にピクト族のブリトン島侵入を警備するために北海・イギリス海峡に配置されたローマの艦隊は *Classis Britannica* とよばれていたことを知るだけである。さて Collingwood のこの批判から間

第 21 図

クラッシキアヌスの墓



もない 1935 年、先きの碑の下の部分に相当する長さ 150 cm、高さ 48 cm、幅 60 cm の碑片が同じ場所から発見されて問題は結着した。無冠の Smith の説が正しかった。これには PROC・PROVINC・BRITA... IVLIA・INDI・FILIA・PACATA... VXOR と書かれていたからである。真中に当る部分がまだ発見されていないが、発見された部分には次のように文字が補われて

Dis [M]anibus [G(ai) Iul(i) G(ai) f(ili) Flab(ia tribu) Alpini Classiciani ... proc (uratoris) provinc(iae) Brita[nniae] Iulia Indi filia Pacata I[ndiana(?)] vxor [f(ecit)] 「ファービアン族・ガアイウスの息子にして属州 ブリタンニアの財務官ガ

アイウス・ユリウス・アルピヌス・クラッシキアヌスの亡き靈に—この碑は悲嘆にくれる妻、インドゥスの娘ユリア・パカタによって建てられた」と読まれた。

彼の妻パカタは今日のボン Bonn (当時 Bonna) を中心にしたライン河南一帯を占めていたトレベリ Treveri といわれるガッリアの部族にして有名な騎兵貴族ユリウス・インドゥス Julius Indus の娘であった。インドゥスは 21 年ドルイド教団と組んでローマに叛乱を起した同族のユリウス・フロウルス Julius Florus の鎮圧に大きな功績をたてた。彼女は丁度この頃に生まれたので「平和の子」の意で Pacata と名づけられたといわれる。

クラッシキアヌスは碑から、その昔ローマがそれ迄相手としていたうちで最大の強敵であったカルタゴの將軍ハンニバル Hannibal (前 247-182) を悩ました古代ローマの貴族ファビウス族の出身であることがわかった。彼はブリタンニアに赴任した時は

40歳を過ぎていたといわれる。彼の政策は実は時宜を得ていたらしい。勤務中に死亡したともいわれる。

彼のこの墓(碑)は今日大英博物館にある。大きさは長さが最初に発見された部分と後の部分とを合わせてみて約2.3mとなることがわかった。幅(奥行)は約2.8mである。高さは推測出来ない。Lethabyの説明によるとこの碑の文字は当時としては抜群に美しい形で刻まれたもので、セリフ(serifs)は軽やかにのびのびとし、特にSの文字のカーブは巧みに描かれ、A及びNの文字の先端のつくりはまさに端麗であるという(p. 179)。

- 105) 注 39 参看。
- 106) 注 104 参看。
- 107) 注 104 参看。
- 108) W. W. Greg が主宰するオックスフォード大学のマロウン・ソサイアティ Malone SocietyがフレッチャーのMSとFolioをリプリントした版(1951年)によると登場人物の名は女王がBonducaであり、登場人物ではないが劇中で娘が述べている父の名もProsutagusとなっているようにTacitusの記録とは少しづつ違う。このことは以下ホブキンズとグローヴァーの劇においても同じである。創作であるから歴史上の記録にない名前が沢山出てくることは言う迄もない。
- 109) 彼の書いた劇の多くにはいわゆる元本があって、それを土台にし、あるいはその通りに書いたものもある。現代でいえば剽窃に当るものもあるが、そのことは彼の作品価値を損うものではない。それはバッハやベートーベンにおいても同じである。問題はわれわれの研究姿勢である。特にその登場人物の性格研究において不覚にも元本の人物研究に陥らないことを自戒するものである。
- 110) もともと各幕1場の5幕ものであったらしい。このように「場」を分けたのはGregの編集による。
- 111) 別名チェンバリンズ・メン Chamberlain's Menともいわれる劇団名である。シェイクスピアはこの劇団のために多くの劇を書いた。
- 112) 上演の記録をたどると次の通りである。
- 《1696年》興行日不明(以下いずれの年も不明)。上演劇場ドルウェアリ・レーン劇場 Drury Lane Theatre (以下DLと略す)^{*1}。Caratach=Powell(前者が劇中人物、後者が配役。以下これに準ず)、Bonduca=Mrs Knight, Claudia=Mrs Rogers, Bonvica=Miss Cross。
- 《1706年》DL。他の記録なし。
- 《1731年》劇場名の記録なし。Caratach=Bridgwater, Venutius=Cibber, Bonduca=Mrs Butler, Claudia=Mrs Cibber, Bonvica=Miss Rafter。
- 《1778年》ヘイマーケット劇場 Haymarket Theatre^{*2}。コルマン Colman^{*3}の改作。Caratach=Digges, Bonduca=Miss Sherry。
- 《1795年》コベント・ガーデン劇場 Covent Garden Theatre (以下CGと略)^{*4}

Caratach = Holman, Bonduca = Mrs Pope, Bonvica = Miss Wallis.

《1808年》 CG. Caratach = Cooke, Penius = C. Kemble, Judas = Munden.

《1837年》 DL. 題が *Caractacus* と変えられプランシェ J. R. Planché^{*5} の変作。記録なし。

またこの頃フレッチャーの劇をパウエル George Powell^{*6} が改作して上演していた記録がある。

《1695年9月(?)》 DL. Prologue, Spoken by Mr Powel^{*7}; Epilogue, Spoken by Miss Dennychock; Suetonius = Verbruggen. Petilius = Harland, Junius = Hill, Decius = Eldred, Macer = Mic. Lee, Caratach = Powel Jr., Venutius = Horden, Hengo = Miss Allison^{**}, Nennius = Mills, Macquaire = Simpson, Bonduca = Mrs Knight, Claudia = Mrs Rogers, Bonvica = Miss Cross.

興業日の9月も確かでない。1695年10月24日—28日の *London Gazette* 誌がこの劇を取上げていることから推測して興行は9月から10月初旬と思われる。この上演は1696年の興行(上記)と殆んど同じ俳優・配役で行われたようである。

《1699年1月28日(土)》 DL(?)

《1705年2月12日》 DL

《1706年2月12日(火)》 DL

《1706年2月18日(月)》 DL

《1715年8月5日(金)》 DL

《1715年8月9日(火)》 DL

《1715年8月12日(金)》 DL

《1715年8月23日(火)》 DL

《1716年6月26日(火)》 DL

《1716年7月10日(火)》 DL

*1 DL はロンドンで最も有名且つ使用されている最古の劇場である。1662年チャールズ二世 Charles II の勅許によって建てられた。初興行は1663年5月7日であった。その後火災などで建てかえられ現在の4度目のもので1812年の建造である。Theatre Royal (in Bridge Street) の名でも知られる。チャールズ二世(1630.5.29—1685.2.6, r.1660—1685)は王政復古で新しい王となったが約束を違えて、絶対王政をしく一方に享樂的で淫逸な生活を行ったためその風潮は忽ち市中に拡がってこの頃沢山のコーヒー店や酒場それに退廢的な歡樂街が出現した。このDLにしてもCGにしてもすべてこのような環境で出来たもので、王の勅許とはいってもそれは王に献金することによって許状を得るものであるから、その名に'Royal'がついているからといってわれわれがこれをいちいち「王立」とか「王室」としては大変おかしいことになる。今日ロンドンの市内バスに随分求人広告の出で、なり手のない郵便屋も Royal Mail の post-man である。歴史的経緯をみなくてはならない。

*2 1720年ロンドンの中心街トラファルガー広場 Trafalgar Square に近いヘイマーケッ

ト通りに建てられた。初興行は1720年12月29日で当時はLittle Theatreともいわれた。その後一時閉鎖されながらも時々興行が行われるといった変則的な劇場となり、1758年正規の劇場の認可を得、更に1767年5月14日にはTheatre Royalとしてデビューした。1820年の都市計画で建て直され1821年7月4日開業し今日に及んでいる。この劇場には俳優のお化けが出るので有名である。

- *³ 1732—1794。オックスフォードで法律を学んだ。文筆家として名をなしたがギャリック（注116）を知って劇作を手がけるようになった。
- *⁴ チャールズ二世の勅許を得ていて建てられたもので初興行は1732年12月7日。現在の建物は1857年—8年の建造による3度目のもので、コリント式柱廊で飾られた白亜の豪華な建物である。DLに近く、同じTheatre RoyalでRoyal Opera Houseの名で有名のように英国のオペラ・バレ界の本山の地位を占めてきているが、DLと同じく朝市の立つ予想のつかない汚い界隈にある。
- *⁵ 1796—1880。パレスク、パントマイム、メロドラマ作家。
- *⁶ ca.1658—1714。俳優・劇作家。フレッチャーのを改作して上演したこの1695年は丁度週給が2倍になって彼は精力的に仕事に取組んでいた頃である。
- *⁷ Powellのことで上記※6の父。Caratachを演じたのはその息子G. Powell。
- *⁸ HengoはBonducaの甥に当るがこのように男性の役に女性を使い、またその反対のこともしばしばあった。

113) この劇の出版は初演と同年の1697年である。第22図がその第1頁（Title Page）である。これに続いて当時の慣わしに従って献辞がある。当時シェイクスピア劇などに匹敵する評判の劇を書いていたコングリーブWilliam Congreve (1670—1729) が自分にこの劇を書くよう激励と勇気とを与えてくれたことに対する感謝の献辞が3頁続いている。そうして次にこの時の上演でのPrologueとEpilogueが各1頁ある。Prologueの最初の3行は特に注目すべきものである。

Prologue. Spoke by Mr. Betterton. (綴り・大文字の使用など原文通りである。但し古い形のfとεは筆者が現代活字のsとcに入れかえた)

Do you not wonder, Sirs, in these poor Days,
Poets should hope for Profit from their Plays?
Dream of a full Third Day, nay, good sixth Night,
(Especially considering how they Write.)
But so it is ; and thus I go to show it,
Wo to us Players, every one turns Poet.
All Write alike, and therefore every Brother,
Free from all Envy, stands by one another ;
They live more peaceably than Bees, no doubt,
Since not one drone of all is driven out.
Our Author is so green, and young a thing,

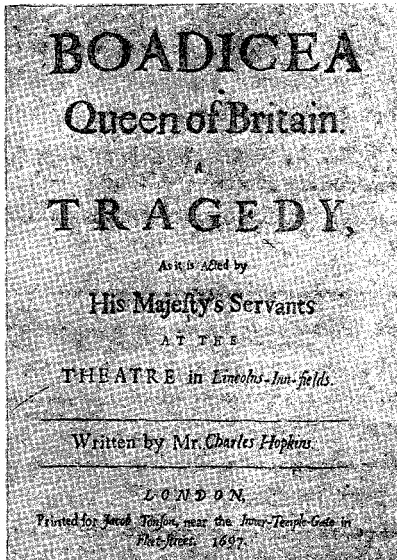
'Tis hard if he can yet have lost his Sting!
 Those Boxes! He may beauteous Gardens call,
 Fair are the Flowers, and he sucks Sweets from all ;
 Nor is he less oblig'd to Masks and Beaus,
 Who pay for Plays ; even when they borrow Cloaths.
 On your united Favours he depends,
 And thinks you all his, and our House's Friends.
 Tho' you hate Blood-shed, out of pure good Nature,
 As Poets, Criticks, or as Fops hate Satyr.
 Be not to Day afraid to see us Bleed,
 But let for once, a Tragedy succeed.

(この Prologue を述べたベェタートンは DL で活躍していた俳優であったが、不満分子と共にリンカーンズ・イン・フィールド劇場(次注)に移った。ここで彼等がはじめて興行した 1695 年 4 月 30 日の出し物はコングリーブの *Love for Love* で好評を得たものであった)

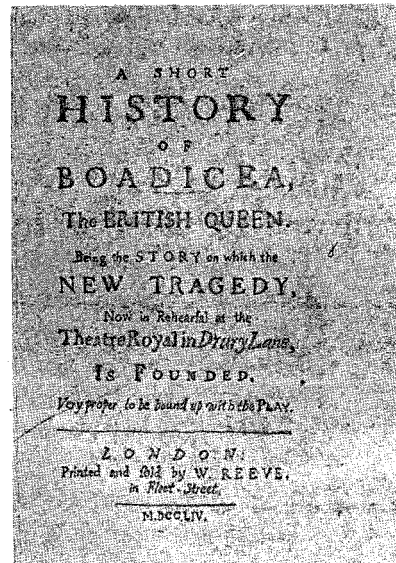
この時の配役も大きな活字で 1 頁を費しているがこれは主役に当るもので、いわゆるその他大勢に当る 9 人のドルイド司祭や兵士たちは記録されていない。

Boadicea, *Queen of Britain* = Mrs. Barry ; Camilla, Venutia, *Her Daughters* = Mrs. Bracegirdle, Mrs. Bowman ; Cassibelan, *A British Prince, General of their Armies* =

第 22 図



第 23 図



Mr. Betterton ; Paulinus, Decius, *Joint Generals* = M.* Kynaston, Mr. Hudson ; Fabian, *Favourite to Paulinus* = Mr. Freeman ; Caska, *Favourite to Decius* = Mr. Sanford. (*こ、だけMとなっている)

114) またの名は Lisle's Tennis-Court あるいは Duke's House. 1656 年建造された Tennis-Court が 1661 年劇場に改築され、1661 年 6 月 28 日初興行された。1848 年取壊されて現在は跡形もない。今日この辺りは公園と裁判所 Royal Courts of Justice 及びその関係の建物などの所在地である。

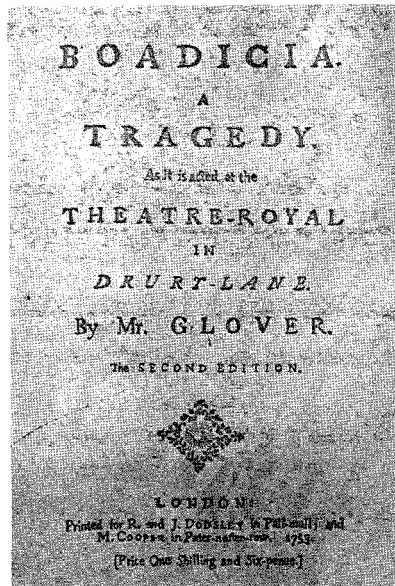
115) 著者名のない *A Short History of Boadicea, The British Queen* という小冊子 (22 cm × 14 cm, 23 頁) が 1754 年ロンドンで出版されている。この本の第 1 頁には「並々ならぬ才能に恵まれた詩人によって書かれた劇 *Boadicea* はやがて Drury-Lane の Royal Theatre で上演されるであろう」と書かれている。作者のグローヴァーが名を伏せて自分で書いたものと思われる。何かの都合でこの本の出版は劇の上演とは前後したが、この本で注目することは、ローマ軍のモノ島攻略はポウディッカを始めブリトン人にとっての大きな侮辱であると述べていることと、カルティマンドウアのコンソートのヴェヌティウスがポウディッカの叛乱を積極的に支援していることである。Milton の *Britain* を参考にして書いているところがある。尚この本では女王の名は劇のと違い Boadicea である。(第 23 図)

116) 当時の DL は一代の名優ギャリック David Garrick (1716 または 1717-79) が率いて男女俳優 63 名、歌手 7 名、踊子 24 名を擁していた。12 月 1 日の初演にギャリックはトリノウァンテス族の族長の Dumnorix の役を演じた。この劇の主役がギャリック、すなわち Dumnorix に与えられたこと

第 24 図

は丁度フレッチャーの *Bonduca* で主役がバービィヂ演じた Caratack にあったのに共通している。場所は Dumnorix の軍営の前のブリトン軍の陣地という以外は何の指示もない。以下は 12 月 13 日までの興行の状況である。

《12 月 1 日 (土)》DL (以下いずれも DL での上演である)。当時の配役は第一版、第二版 (共にロンドン) に記録され共に同じである。Dumnorix = Mr. Garrick, Tenantius = Mr. Burton, Ebrancus = Mr. Mozeen, Flaminius = Mr. Havard, Ænobarbus = Mr. Mossop, Boadicea = Mrs. Pritchard, Venusia = Mrs. Cibber, Roman Ambassador, Icenians, and Trinobanitans (この 3 つには配役の記載のないままである。しかし *The*



London Stage: 1660-1800 にはこの3つに Bransby, Davies and Jefferson と配役の名が記録されている)。Prologue, Spoken by Mr. Mossop; Epilogue, Spoken by Mr. Havard でそれぞれその言葉が印刷されている。 *The London Stage* によるとボォイス Dr William Boyce (1710-79) によってこの劇のために新しく作曲された音楽が幕間に演奏され、劇によくマッチして好評であったとのことである。彼は1749年から1769年までロンドンの All Hallows the Great と All Hallows the Less (両教会とも今はない。ウォルブルクに近いこの界隈は古い建物が取壊され新しい高層ビルが沢山建ち並んだ。両教会のあったところもその一帯は現在 国際電話局の広大な建物が建造中である) のオルガン奏者として有名であったが、この多才なオルガン奏者は劇音楽などの分野にも広く活躍し、今やその勤めは彼の活動の拘束となったのでその任を辞した程であった。この日の興行収益は230ポンド (£ 230) であった。

《12月4日(火)》以下配役は初日に同じと思われる。 £ 120 (興行収益)

《12月6日(木)》 £ 140

《12月7日(金)》 £ 150

《12月8日(土)》 £ 130

《12月10日(月)》 £ 130

《12月12日(水)》 £ 90 この日台本が印刷され市販された。1部 1s. 6d. (今日の
新通貨では7.5ペンス)

《12月13日(木)》 £ 100

尚、参考のためにこの同じ頃上演されていたシェイクスピア劇の興行成績をみてみると次の通りである。

| | | | |
|---------------|-----|-------------------------------|-------|
| 1753年11月9日(金) | D L | <i>King Henry VIII</i> | £ 120 |
| 11月15日(木) | D L | <i>King Lear</i> | £ 200 |
| 11月20日(火) | D L | <i>As You Like It</i> | £ 80 |
| 11月21日(水) | D L | <i>Much Ado About Nothing</i> | ? |
| 11月22日(木) | D L | <i>King Lear</i> | £ 200 |
| 11月28日(水) | D L | <i>King Richard III</i> | £ 210 |
| 12月3日(月) | C G | <i>Romeo and Juliet</i> | ? |
| 12月8日(土) | C G | <i>Romeo and Juliet</i> | ? |
| 12月17日(月) | D L | <i>King Henry VIII</i> | £ 70 |
| 12月18日(火) | D L | <i>King Richard III</i> | £ 150 |
| 12月18日(火) | C G | <i>Romeo and Juliet</i> | ? |

シェイクスピア以外では良いのは £ 130-140、悪いのは £ 70-50 であるのでグローヴァの興行成績は悪いものではなかった。また本の方も12月12日の初版に次いで第二版が、その残り僅かしかない1753年内に発行されているところからみてこの劇は好評であったように思われる。

117) Boadicea と綴ったのはクーパーが最初でないことをわれわれは既に知っている。ホ

プキンズが Boadicea, グローヴァが Boadicia と綴ったが、劇と詩とは自ずと違い、注1のように今日 Boadicea と広く行きわたっているのはクーパーの詩によってである。

- 118) Gaius Valerius Cattulus. ca. 前84—前54。ローマ最大の抒情詩人といわれる。
- 119) C. Tennyson, p. 323 及び p. 519。
- 120) 生年は848年か849年。没年は更に諸説があって899年, 900年, 901年のそのいずれかの年の10月26日または28日とされる。ケント及びエセックスの王エゼルウルフ Aethelwulf の第5子に生れた。4歳頃に1人で、また855年には父王と共にローマ法王の下に赴いている。871年、邪悪な兄たちのそれぞれの短い治世を受けついで若冠22歳で王となったがその生涯は侵略者デーン人との戦争に明け暮れて陣中で過すことが多かった。しかしその間学問を奨励し、各地の諸寺に命じて国史を編纂せしめ、自らも執筆者となった。これが今日貴重な年代記 *Anglo-Saxon Chronicle* である。またこの他にもラテン語からの古典の翻訳、法典の制定などを行い文武両道に卓越した王で「大王」の名を冠する唯一人の英国王である。この王についての挿話は日本でも膾炙している。
- 121) 彼は1836年から1874年までの王立美術院展に41点出品している。この中にはアルフレッド大王像の他にヴィクトリア女王騎馬像(1854年)、アルバート公像(1863年。これは特にヴィクトリア女王に献ぜられた実物大の像である)、チャールズ二世像(1867年)などが有名である。1868年と1870年にはリヴァプール市 Liverpool にアルバート公とヴィクトリア女王の像を制作している。彼はまた1840年から1860年にパル・マル Pall Mall 通り(セント・ジェームズ公園 St. James's Park の近く。(第6図))に元あった British Institution に5点出品している。Thompsonによると彼の制作になる像・胸像はロンドン市内に多数見られるという。
- 122) 1819.8.26—1861.12.14 ドイツの公爵の出で1840年2月10日ヴィクトリア女王と結婚しそのコンソートとなった。女王をよく助け名君であったのでその死は非常に惜しまれた。特に女王の悲嘆は傍目にも痛々しい程であったという。今日英国の各地に公を記念しての碑・建物・像・広場が非常に多い。
- 123) もともとの英国王室の宮殿ではない。後代のバッキンガム公爵家を興したシェフィールド John Sheffield, Marquess of Normandy が1705年に建てたものをジョージ三世 George III が1762年に入手し、以来改築がなされ本格的な宮殿となったのはヴィクトリア女王がここに住むようになってからである。それまでの宮殿はセント・ジェームズ宮殿 St. James's Palace であった。
- 124) バッキンガム宮殿のある Palace Gardens の南隅にある。1825年の建物なることが屋上の風見の刻印でわかる。現在 Bay (栗毛), Windsor Grey (灰色) など35頭の馬がいる。この長官は宮内長官に次ぐ高官で今日1936年以来第10代ボオウファート Beaufort 公爵がその任にある。
- 125) Sir John Isaac Thornycroft (1843.2.1—1928.6.28)。両親と弟がすぐれた彫刻家であったが彼はボウディッカの像の台座に C. E. と刻まれているように(注129)すぐれ

- た技術家で、特に造船技師として名を成した。両親のローマ滞在中に生まれ、教育はスコットランドのグラスゴー Glasgow の大学で受けた。1902年 Sir の称号を受けたが弟のウィリアム William Hamo (1850.3.9—1925.12.18) も1917年に Sir を授けられた。
- 126) 1836年12月22日に C.R. スミス (注104) によって創立された。
- 127) A. E. Housman の *A Shropshire Lad* の出版が1896年であった。その悲痛にまで美しい詩はこれらの戦争に出陣する若者たちの心を捉え、彼等は背囊に彼の詩集を入れて戦場に赴いた。
- 128) 筆者がこの像をみて不思議に思ったことは、本文でやがて述べられるように娘が上半身裸であることと、ボウディッカが御する戦車の車輪に大鎌がついていることであつた。ブリタンニアの部族の主戦力は歩兵にあって戦車を使う部族は少く、しかも大鎌を車輪につけることを筆者は知らない。ソォニクロフトが何故こうしたかを伝えるものがない。多分共に制作上の効果からのことと推察する。
- 129) クーパーのこの詩は像台座の右側に刻まれている。参考のために記すると、台座の正面には次の文字が刻まれている。

BOADICEA
(BOUDICCA)
QUEEN OF THE ICENI
WHO DIED A. D. 61
AFTER LEADING HER PEOPLE
AGAINST THE ROMAN INVADER

また左側は次の通り。

THIS STATUE BY THOMAS THORNYCROFT
WAS PRESENTED TO LONDON BY HIS SON
SIR JOHN ISAAC THORNYCROFT C. E.
AND PLACED HERE BY THE LONDON COUNTY COUNCIL
A. D. 1902.

- 130) 1066年は英国史上有名な年号である。1066年1月5日にエドワード証信王 Edward the Confessor (多くは懺悔王と訳される) が死ぬと、エドワードの義弟のハロルド Harold とフランスのノルマンディ公ウィリアムとの間に王位継承の争いが起きた。1066年9月28日ウィリアムは9,000の兵を率いてケントの海岸に上陸した。迎える10,000のハロルドの軍と10月14日ヘイスティングズ Hastings の近くのセンラック Senlac で決戦が行われた。ウィリアムは William the Conqueror とよばれる英国王となった。これがノーマン・コンクエストと称されるものである。この時以来英国は外敵の侵略を受けていない (SHE)。

目録 (1) PLACE-NAMES (ローマン・ブリトン名と現代名との対照表)

- a・ローマン・ブリトン名についての単行本はない。それが最も多く集録されたものは

Horsley の *Britannia Romana* の巻末付録であるが誤記がある。以下は筆者の集録したもののうち本論の関係分である。

b・便宜上左欄のローマン・ブリトン名に※印を付した。

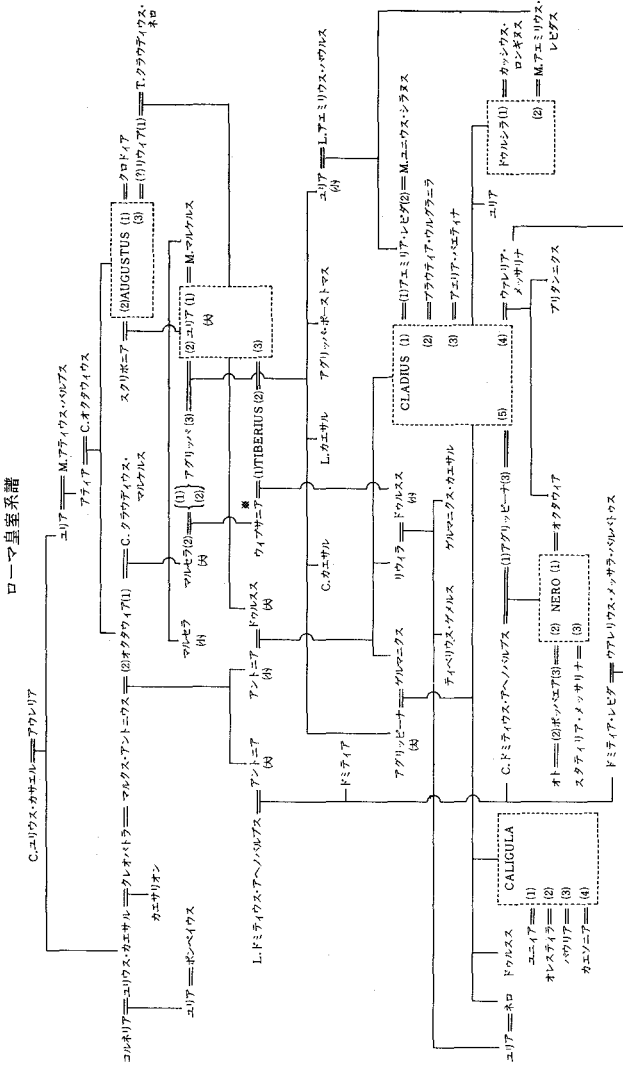
| | |
|----------------------|--------------------|
| ※ Aquae Sulis | Bath |
| Anglesea | Mona |
| Anglesey | Mona |
| Bath | Aquae Sulis |
| Caerleon | Isca Silurum |
| Caerwent | Venta Silurum |
| Caister St Edmunds | Venta Icenorum |
| Caistor St Edmund(s) | Venta Icenorum |
| ※ Calleva Atrebatum | Silchester |
| Cambridge | Durolipons |
| ※ Camulodunum | Colchester |
| Canterbury | Durovernum |
| Carlisle | Luguvallium |
| Chester | Deva |
| Cirencester | Corinium Dobunorum |
| Colchester | Camulodunum |
| ※ Corinium Dobunorum | Cirencester |
| ※ Deva | Chester |
| Dorchester | Durnovaria |
| Dorchester on Thames | 不明 |
| ※ Durnovaria | Dorchester |
| ※ Durobrivae | Water Newton |
| ※ Durolipons | Cambridge |
| ※ Durovernum | Canterbury |
| ※ Durovigutum | Godmanchester |
| ※ Eboracum | York |
| ※ Eburacum | York |
| ※ Etocetum | Wall |
| Exeter | Isca Dumnoniorum |
| ※ Glevum | Gloucester |
| Gloucester | Glevum |
| Godmanchester | Durovigutum |
| Hadrian Wall | Vallum Hadriani |
| High Cross | Venonae |

| | |
|----------------------|--|
| ※ Isca Dumnoniorum | Exeter |
| ※ Isca Silurum | Caerleon |
| ※ Lactodorum | Towcester |
| Leicester | Ratae |
| ※ Letocetum | Wall |
| Lincoln | Lindum |
| ※ Lindum | Lincoln |
| ※ Londinium | London |
| London | Londinium |
| ※ Luguwallium | Carlisle |
| ※ Metaris Aestuarium | The Wash |
| ※ Mona | Anglesea, Anglesey |
| Newcastle upon Tyne | Pons Aelius |
| ※ Pons Aelius | Newcastle upon Tyne |
| ※ Ratae | Leicester |
| Richborough | Rutupiae |
| ※ Rutupiae | Richborough |
| St. Albans | Verulamium |
| Silchester | Calleva Atrebatum |
| ※ Tamesis | The Thames |
| Thames (The) | Tamesis |
| Towcester | Lactodorum |
| ※ Vallum Hadriani | Hadrian Wall |
| ※ Venonae | High Cross |
| ※ Venta Belgarum | Winchester |
| ※ Venta Icenorum | Caister St Edmunds, Caistor St Edmund(s) |
| ※ Venta Silurum | Caerwent |
| ※ Verulamium | St. Albans |
| ※ Victis | Wight |
| ※ Viroconium | Wroxeter |
| ※ Waeclinga Straet | Watling Street |
| ※ Waetlinga Straet | Watling Street |
| Wall | Etocetum, Letocetum |
| Wash (The) | Metaris Aestuarium |
| Water Newton | Durobrivae |
| Watling Street | Waeclinga Straet, Waetlinga Straet |
| Wight | Victis |

Winchester
Wroxeter
York

Venta Belgarum
Viroconium
Eboracum, Eburacum

目録 (2)



1. 最初のウァレリア・メッサリアはダグリス・マックスィムスとの縁とする説と、
 2. 最初メッサリアはダグリスとの縁とする説がある。
2. 原文字は墨を著す。

BIBLIOGRAPHY

- W. C. Adams, *A Dictionary of the Drama*, London, 1904.
- R. Arnold, *A Social History of England*, London, 1966.
- J. Asbach, *Analecta Historia et Epigraphica Latina*, Bonn, 1878.
- Bartholomew's Reference Atlas of Greater London*, Edinburgh, 1968.
- Bartholomew Road Atlas Britain*, Edinburgh, 1974.
- A. Birley, *Life in Roman Britain*, London, 1964.
- E. Birley, *Roman Britain and the Roman Army*, Kendal, 1953.
- P. H. Blair, *Roman Britain and Early England*, Edinburgh, 1963.
- A. E. R. Boak & W. G. Sinnigen, *A History of Rome to A. D. 565*, New York, 1965.
- F. C. Bourne, *A History of the Romans*, Boston, 1966.
- J. H. Buckley, *Tennyson : The Growth of a Poet*, Oxford, 1960.
- A. R. Burn, *Agricola and Roman Britain*, London, 1953.
- A. R. Burn, *The Romans in Britain*, Oxford, 1969.
- The Cambridge Ancient History*, Cambridge, 1963. (特に第10巻)
- R. W. Chambers, *England before Norman Conquest*, London, 1926.
- Chambers's Encyclopaedia*.
- W. Churchill, *History of the English-Speaking Peoples*, London, 1956.
- T. Codrington, *Roman Roads in Britain*, London, 1905.
- R. G. Collingwood, *Roman Britain*, London, 1923.
- R. G. Collingwood, *The Royal Commission on Historical Monuments (England) : Roman London*, London, 1927.
- R. G. Collingwood & J. N. L. Myres, *Roman Britain and the English Settlements*, Oxford, 1968.
- R. G. Collingwood & I. Richmond, *The Archaeology of Roman Britain*, London, 1969.
- H. C. Coote, *The Romans of Britain*, London, 1878.
- G. J. Copley, *Names and Places*, London, 1963.
- C. D. N. Costa (Ed.) *Seneca*, London, 1974.
- L. Cottrell, *The Great Invasion*, London, 1958.
- L. Cottrell, *Seeing Roman Britain*, London, 1956.
- The Poetical Works of William Cowper*, London, 1959.
- The Dictionary of National Biography*, Oxford, 1950.
- D. Divine, *The North-West Frontier of Rome*, London, 1969.
- D. R. Dudley & G. Webster, *The Rebellion of Boudicca*, London, 1962.
- E. Ekwall, *The Oxford Dictionary of English Place-Names*, Oxford, 1960.
- C. Elton, *Origins of English History*, London, 1882.
- Enciclopedia Italiana*.

Encyclopaedia Britannica.

English Place-Names Society, *The Place-Names of Hertfordshire*, Cambridge, 1938.

Everyman's Encyclopaedia.

G. Ferrero, *Characters and Events of Roman History*, London, 1909.

J. Fletcher, *Bonduca*, Oxford, 1951.

J. Frazer, *The Golden Bough*, London, 1959.

S. Frere, *Britannia*, London, 1967.

E. Gibbon, *The Decline and Fall of the Roman Empire*, London, 1838.

R. Glover, *Boadicia*, London, 1753.

R. Glover (?), *A Short History of Boadicea*, London, 1754.

M. Grant, *Nero*, London, 1970.

A. Graves, *The British Institution : 1806—1867*, London, 1908.

A. Graves, *The Royal Academy of Arts*, London, 1970.

R. Gunnis, *Dictionary of British Sculptors : 1660—1851*, London, 不明.

H. A. Harben, *A Dictionary of London*, London, 1918.

T. Harbottle, *Dictionary of Battles*, London, 1971.

P. Harnack, *All about Ships & Shipping*, London, 1964.

M. Harrison, *London beneath the Pavement*, London, 1971.

W. O. Hassall, *Who's Who in History*, Oxford, 1960.

F. Haverfield, *The Roman Occupation of Britain*, Oxford, 1924.

F. Haverfield, *The Romanization of Roman Britain*, Oxford, 1923.

B. Henderson, *The Life and Principate of the Emperor Nero*, London, 1903.

B. Henderson, *The Study of Roman History*, London, 1921.

Heyden & Scullard, *Atlas of the Classical World*, London, 1967.

C. Hibbert, *London : The Biography of a City*, London, 1969.

G. Hindley, *A History of Roads*, London, 1971.

R. Holinshed's *Chronicles of England, Scotland, and Ireland*, London, 1807.

G. Home, *Roman London*, London, 1948.

C. Hopkins, *Boadicea, Queen of Britain*, London, 1697.

J. Horsley, *Britannia Romana*, London, 1732.

A. Hübner, *Inscriptiones Britanniae Latinae*, Berlin, 1873.

K. H. Jackson, *Language and History in Early Britain*, Edinburgh, 1953.

H. Kiepert, *Formae Orbis Antiqui*, Berlin, 1894.

W. V. Lennep (Ed.), *The London Stage : 1660—1800*, Illinois, 1965.

W. R. Lethaby, *Londinium*, London, 1923.

J. Lindsay, *The Romans Were Here*, London, 1956.

J. Lingard, *A History of England*, London, 1837.

- J. Liversidge, *Britain in the Roman Empire*, London, 1968.
- J. E. Lloyd, *A History of Wales*, London, 1954.
- LCC, *Survey of London*, vols. XII—XV, *The Parish of All Hallows Barking*, London, 1929 & 1934.
- LCC, *Survey of London*, vol. XX, *Trafalgar Square and Neighbourhood*, London, 1940.
- LCC, *Survey of London*, vol. XXXV, *The Theatre Royal, Drury Lane and the Royal Opera House, Covent Garden*, London, 1972.
- R. R. Lynam, *The History of the Roman Emperors*, London, 1850.
- I. D. Margary, *Roman Roads in Britain*, London, 1957.
- H. Marsh, *The Caesars*, Newton Abbot, 1972.
- H. Mattingly, *Roman Imperial Civilisation*, London, 1959.
- C. Merivale, *History of the Romans under the Empire*, London, 1865.
- R. Merrifield, *A Handbook to Roman London*, London, 1973.
- R. Merrifield, *Roman City of London*, London, 1965.
- R. Merrifield, *Roman London*, London, 1969.
- J. Milton, *Britain*, London, 1870. (初版は 1670 年)
- T. Mommsen, *The Provinces of the Roman Empire*, London, 1856.
- R. W. Moore, *The Romans in Britain*, London, 1959.
- Muir's Historical Atlas*, London, 1969.
- A. Nicoll, *British Drama*, London, 1927.
- M. P. Nilsson, *Imperial Rome*, London, 1926.
- Ordnance Survey Map of Great Britain* (Special Library Edition で市販されない)
- The Oxford Classical Dictionary*.
- The Oxford Companion to the Theatre*, London, 1967.
- Rapin de Thoyras, *The History of England* (Translated by N. Tindal, 30cm×50cm, 全 21 巻), London, 1732.
- J. S. Reid, *The Municipalities of the Roman Empire*, Cambridge, 1913.
- Richard of Cirencester, *De situ Britanniae*, London, 1809.
- I. A. Richmond, *Roman and Native in North Britain*, London, 1958.
- I. A. Richmond, *Roman Britain*, London, 1955.
- A. I. F. Rivet, *Town and Country in Roman Britain*, London, 1958.
- C. E. Robinson, *A History of Rome*, London, 1961.
- A. Ross, *Pagan Celtic Britain*, London, 1968.
- M. Rostovtzeff, *The Social and Economic History of the Roman Empire*, Oxford, 1957
- B. Russell, *History of Western Philosophy*, London, 1971.
- J. Ryhs, *Celtic Britain*, London, 1884.

- E. T. Salmon, *A History of the Roman World*, London, 1970.
 H. H. Scullard, *From the Gracchi to Nero*, London, 1970.
 O. Seyffert, *A Dictionary of Classical Antiquities*, London, 1957.
 G. Simpson, *Britons and the Roman Army*, London, 1964.
 C. R. Smith, *Illustrations of Roman London*, London, 1859.
 W. Smith, *A Dictionary of Greek and Roman Geography*, London, 1873.
 E. F. Sutcliffe, *A History of Philosophy*, London, 1956.
Poetical Works of Alfred Lord Tennyson, London, 1950.
 C. Tennyson, *Alfred Tennyson*, London, 1968.
 G. Thompson, *London's Statues*, London, 1971.
 G. M. Trevelyan, *History of England*, London, 1966.
 T. G. Tucker, *Life in the Roman World of Nero and St. Paul*, London, 1910.
 University of London Institute of Historical Research, *The Victoria History of the Counties of England : The History of Staffordshire*, vols. I—VIII, Oxford, 1967.
 Ibid, *The History Hertfordshire*, vols. 1—IV, London, 1908.
 The Viatores, *Roman Roads in the South-East Midlands*, London, 1964.
 G. Walter, *Nero*, London, 1957.
 B. H. Warmington, *Nero*, London, 1969.
 G. Webster, *The Roman Imperial Army*, London, 1969.
 A. Weigall, *Nero*, London, 1930.
 G. P. Welch, *Britannia*, London, 1965.
 B. C. A. Windle, *The Romans in Britain*, London, 1923.

(本論は文部省在外研究員として海外出張中のうちの昭和49年12月から翌年5月までマンチェスター及びロンドン滞在の日にかかれたものである。尚本論文の掲載に当っては紀要委員大出教授の御高配に、またこの上なく面倒な校正をこの上ない精力と綿密さで引受けて下さった豊国助教授に深い感謝の念を捧げたい。 昭和50年5月8日、ロンドンにて。)